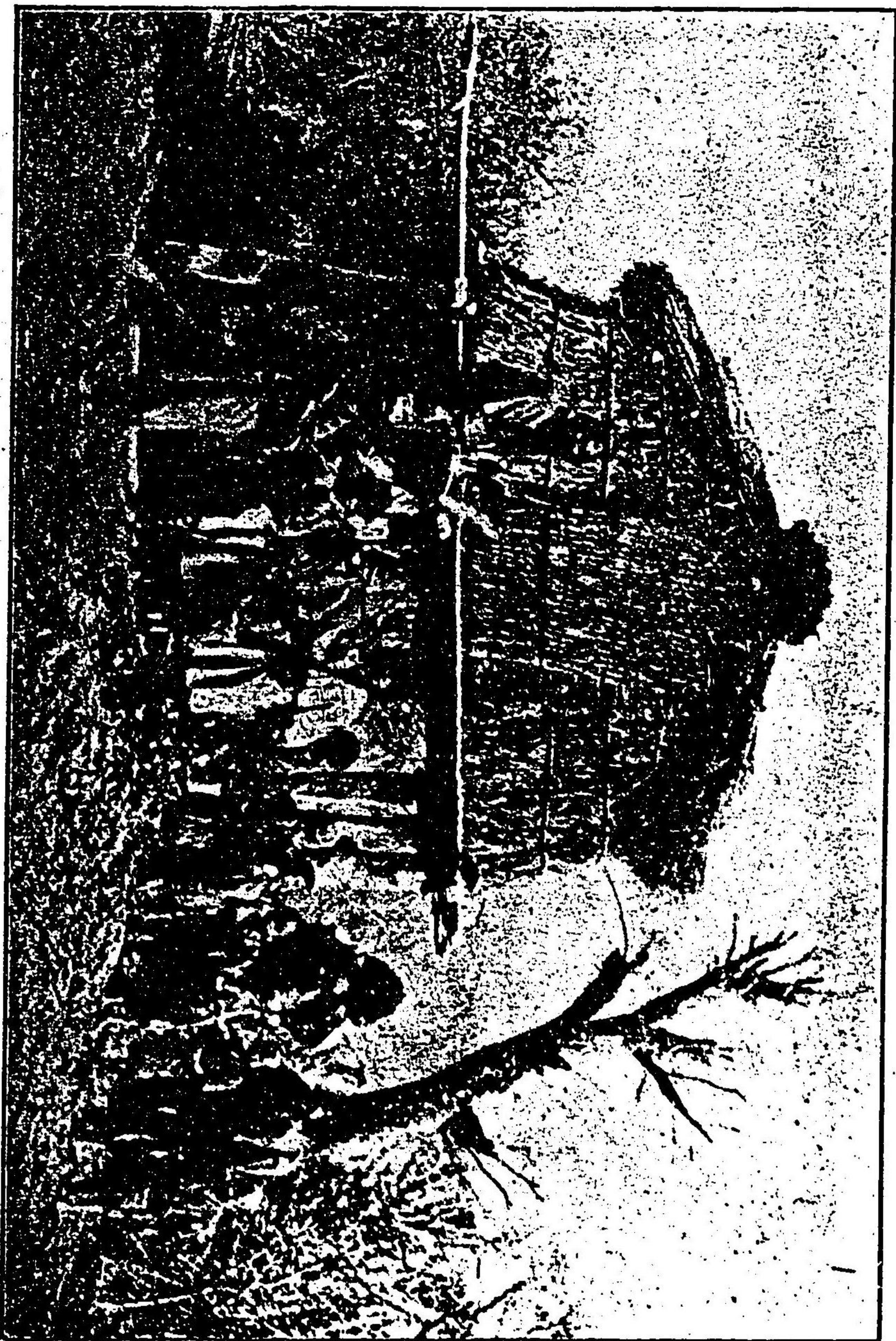


は悪しき病難を起す故なりと云ふ唯家を不祥にするは止らす或は山
 獵或は水漁にも運を悪くし禍難災厄あり子孫の繁榮せざるに至る又
 家の内のみならず畑林等にも其子孫を呪ひ作物の出来を悪くし飲水
 の源を涸す等の祟を爲し終には子孫も村の人々をも殺すに至ること
 あり斯の如く死し老母の靈魂が墮落し凶惡に爲ることあるが故に此
 理由に依り古人が死したる老母の家を焼き拂ふなり家を焼き拂へば
 墓より靈魂が歸り來り子孫に災害を被らしめんと欲するも家なきが
 故迷ふて子孫を見出すこと能はず何の災難も爲し得ざるに依り止む
 を得ず再又其墓に歸る而して其後人々の墓に近寄るは誠に危に近寄
 るなりと云ふ
 前に記せし如く家を焼き拂ふ習慣は現今は廢止したれども四五十年
 前までは尙此習慣存せしと云ふ凡て國民の習慣は容易に消失し難き



(青山學院實業部印行)

STONE HOUSE.
倉のヌイテ

ものなるが故に今日と雖其習慣の少しく趣を變じて残れるものあり
例令へば女既に年老ひて最早餘命長からずと其子孫の思ふ時は其住
家の近傍に老母の爲め極細かの小家を造りて老母を此小家に居らし
め安穩に奉養し考母死なば此の小家を住家の代に焼き拂ふ
然れども余輩は前に記せし家を焼き拂ふ理由は眞實として信するに
足らずと思ふ何となれば今世にても來世にても親の其子孫に災難を
被らさん心ありと云ふは誠に自然の人情に違ふことあり前にも記し
又後にも述べんと欲する所なるがアイヌは家に祈を爲し酒を供へイ
テヲを捧るのみならず他の或アイヌの話に依れば其家を焼き拂ふ理
由は死し老母の靈魂と共に家を天國に送る爲めなりと云へり余輩之
を聞き實に天國に就て考へたる外更に他の思想に適合するものあり
と思へり何と云へば前に記す如く家にも生命ありて今世にて存する

如く來世に往きても存するものと云へばなり
 此事に就て古昔アイヌの遺訓あり左の如し
 (妻死なば其夫は必らず其家を焼き拂ひて直に妻と共に天國に送るべし夫は決して再び妻を娶らざる故今世に於て家の必要なければなり而して夫は後に必らず天國に往くものなるが故に其處に於て既に死して先に往し其妻と共に住みて其家を用ゆるなりと)

第十七章 家具

爐棚 ペンリウクアイヌの出來事自在木皮鍋匙鬘
 揚箸碗類

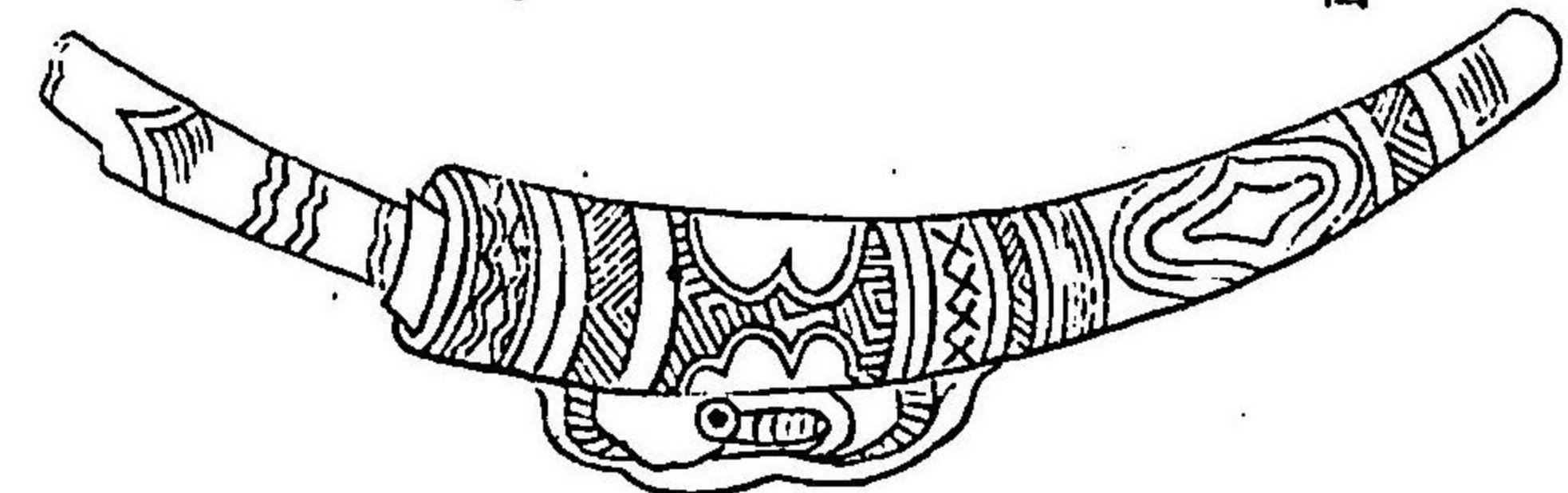
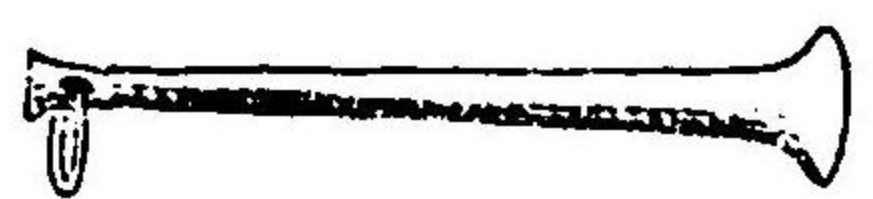
アイヌの用ゆる器具は甚だ少なし家の内の真中に爐あり爐は誠に大にして其内二三個所にて火を焚くことを得る程なり爐の上に爐棚あり之をツナ Tuna と稱す之に料理に用ゆる種々の物を懸け置けり又其上には梁より繩を下り魚熊肉鹿肉を懸け又ツナの上には麥大麥稗粟等を火の煙にて乾すなり
 アイヌの家に來客ある時は段を以て造りたる筵の如きものを床に敷き又其上に柔かなる篋にて造りたる小さき敷物を敷き椅子腰懸坐蒲團なきか故に此敷物の上に人を坐らすなり或時著者は事の間違より

此敷物に就いてアイヌを大に立腹せしめたることあり著者は何の意思なく筵の中にアイヌを巻かんと云ひしが爲めなり此時著者は他の部落に往かんとして仕度を爲し居たりしが老人余を助けて仕度し余の持行かざる物までも筵に巻きつゝ居る

Mortar for mashing salmon eggs.

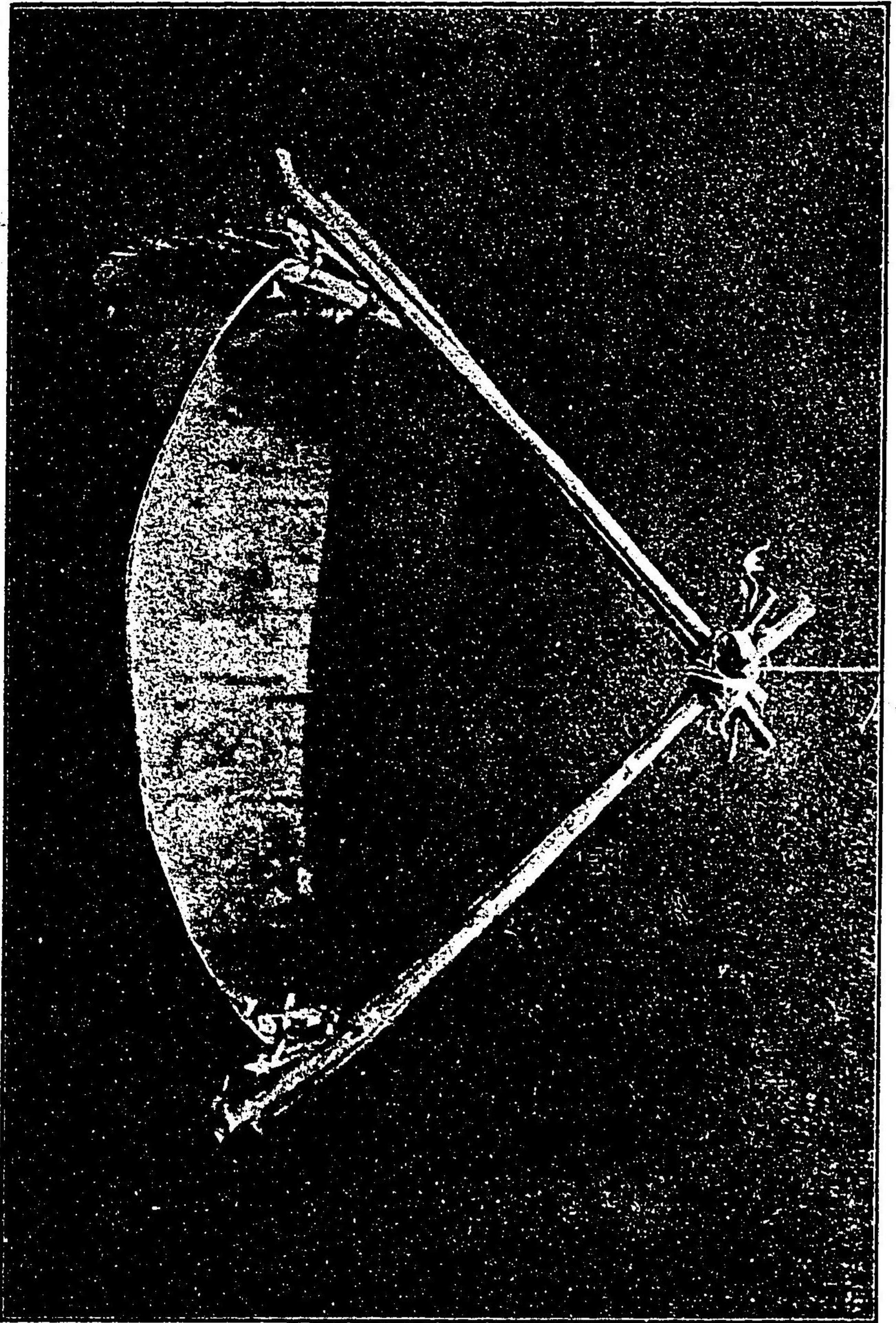


鮭鱒の卵を碎す臼



(knife sheath.) 鞘の刀小

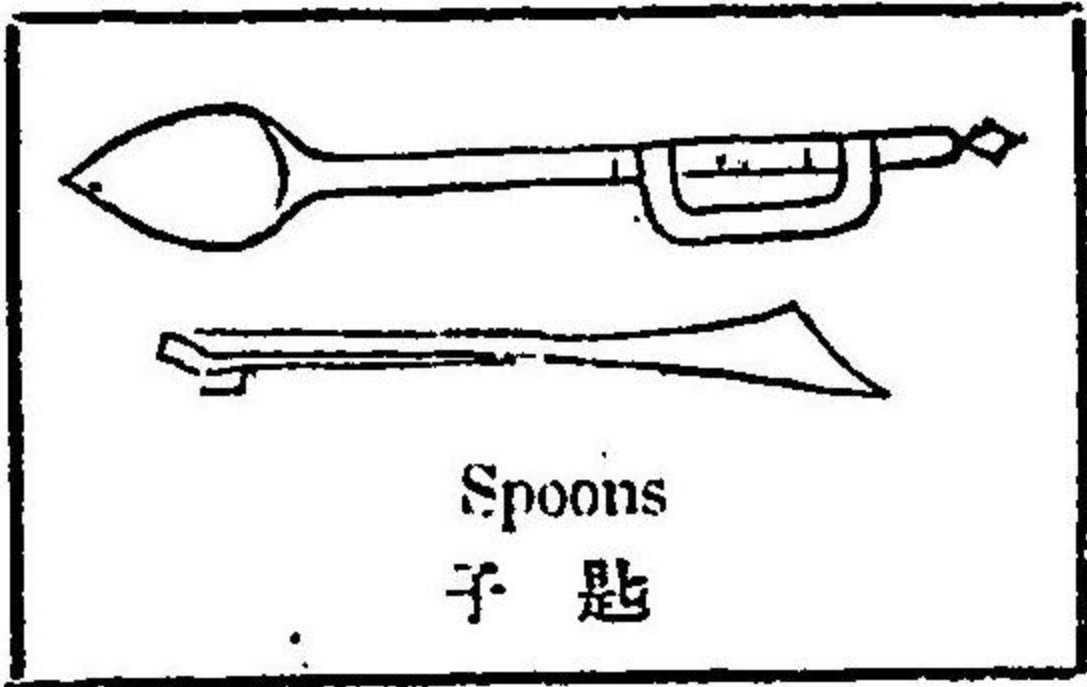
を見て余は笑ひ戯れて曰く汝は其物を残し置きよ若しも此物を筵に巻いて持行くあらば余は汝を筵に巻き共に持行くべしと云ふや否老人は甚だ立腹せり余は其時何故立腹せしか知る能はざりしが今は之を悟れり人を筵に巻くと云ふは即人を葬



COOKING POT MADE OF CHERRY TREE BARK.
鍋しんら造て以を皮木のバカ

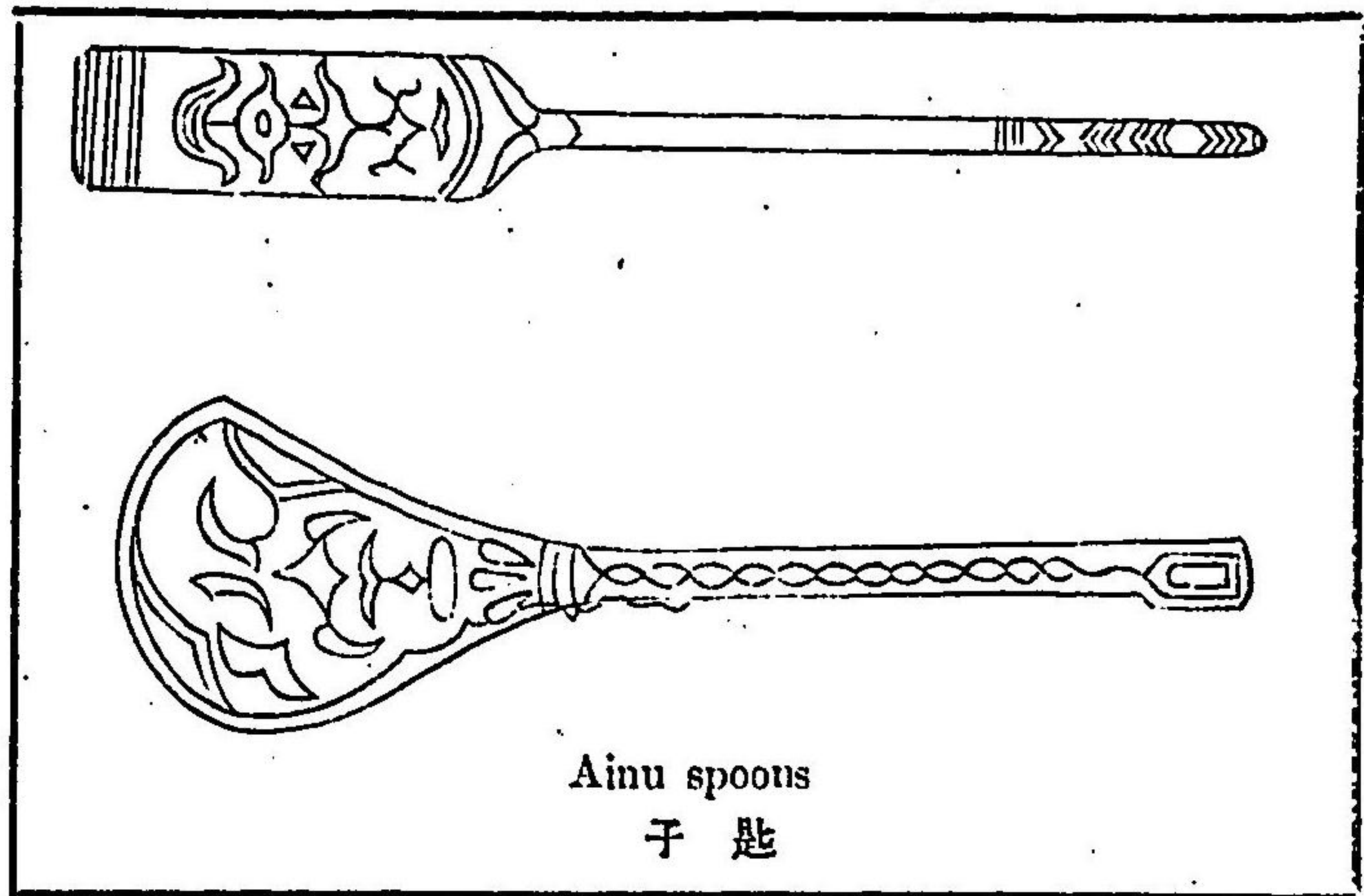
ると同じ意味なり何となればアイヌ死なば其屍は筵に巻きて葬らる
故なり

此人々の用ゆる食器は甚だ少なく殊に巧に造られたるものなし陶器
椀鉢及他の器大概和製にし
てアイヌは鉄を以て器具を
作ることを知らず極稚き子
供に粥を食べさせるに木の
匙子又は貝殻を用へ或は母
親の口一杯に粥を含み子供
に山奥へ獵師等往き食物を養焚せんとするも鍋を忘れし時は驚く可
き哉彼等は櫻の木皮を以て此處に示せる繪の如き鍋を造る此の如き
鍋を用ゆるには先づ鍋一杯に水を満し其中に獸の肉又は野菜を入れ温



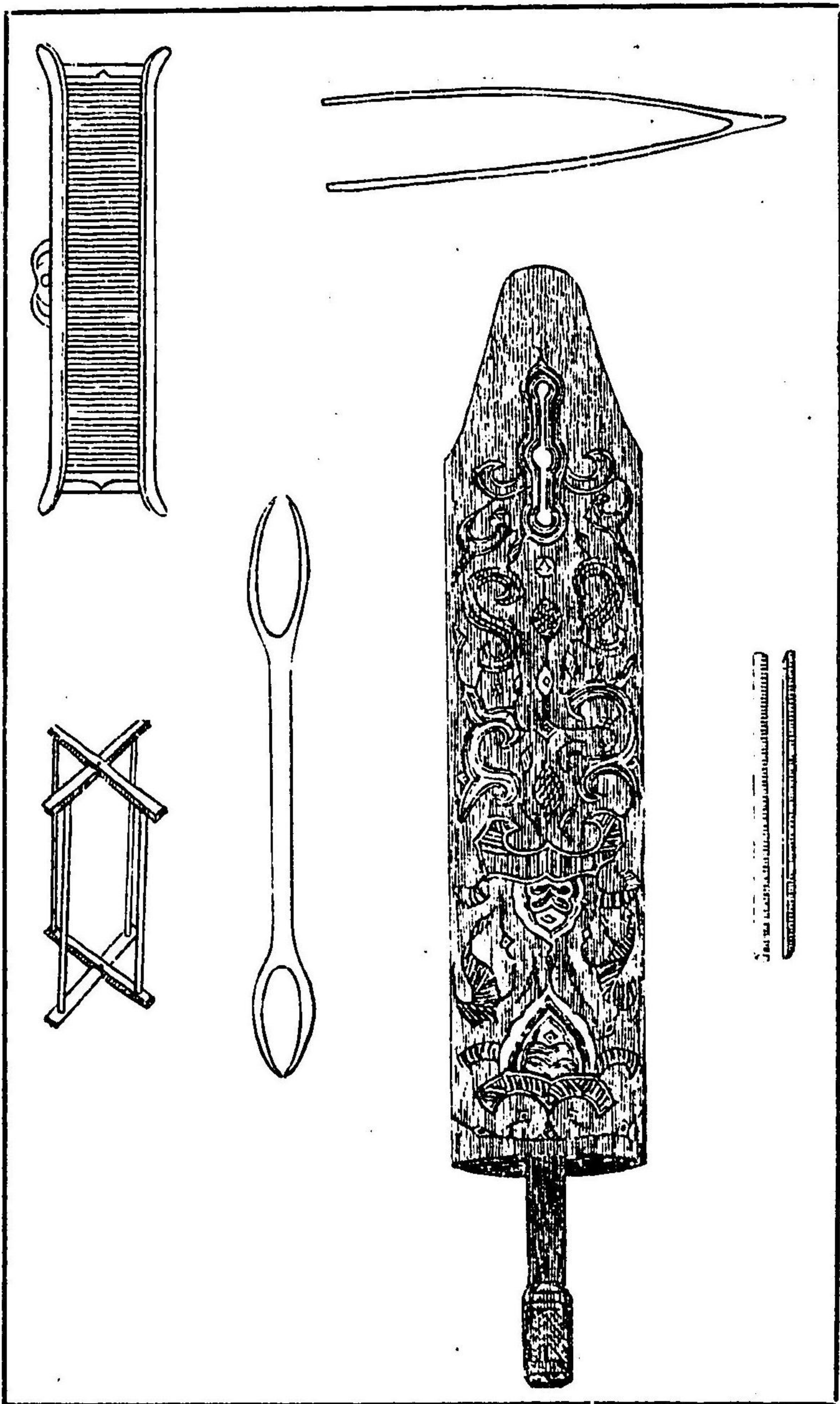
の口に育めることあり又薬
を飲す時も口より口に移す
こと屢ありて是れは清潔な
習慣にあらざれども實際
此く爲すなり
熊又は鹿を獵獲する爲め遙

なる火の上に懸け熟す
 る迄置く木の皮の鍋な
 れば忽ち焼けん我輩
 は思ひたれども能く注
 意して用ゆれば二三度
 程は用ゆることを得る
 なり之に由り見れば未
 だ鉄を知らざる時代に
 於ける或人種の食物を
 煮焚する仕方を知る
 べし
 飯を盛るに用ゆる匙子



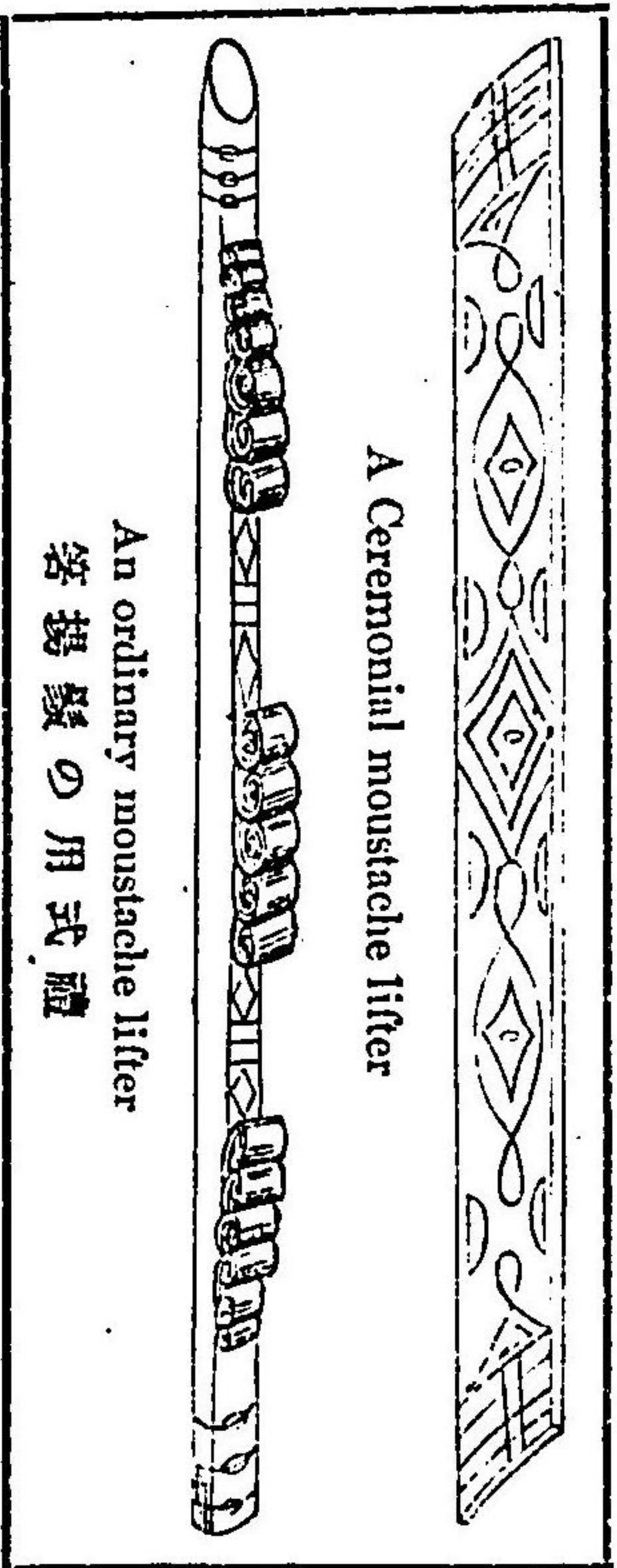
Ainu spoons
 子匙

は種々の形に造
 らる此處に示せ
 る圖の第一は祭
 の時團子を造く
 るに用ゆ第二は
 鍋より粟飯雑炊
 を取るに用ゆ又
 他の形の匙子あ
 れども之に就て
 格別記すへき事
 なし匙子に彫り
 たる模様は定り



機及サヲ
LOOM.

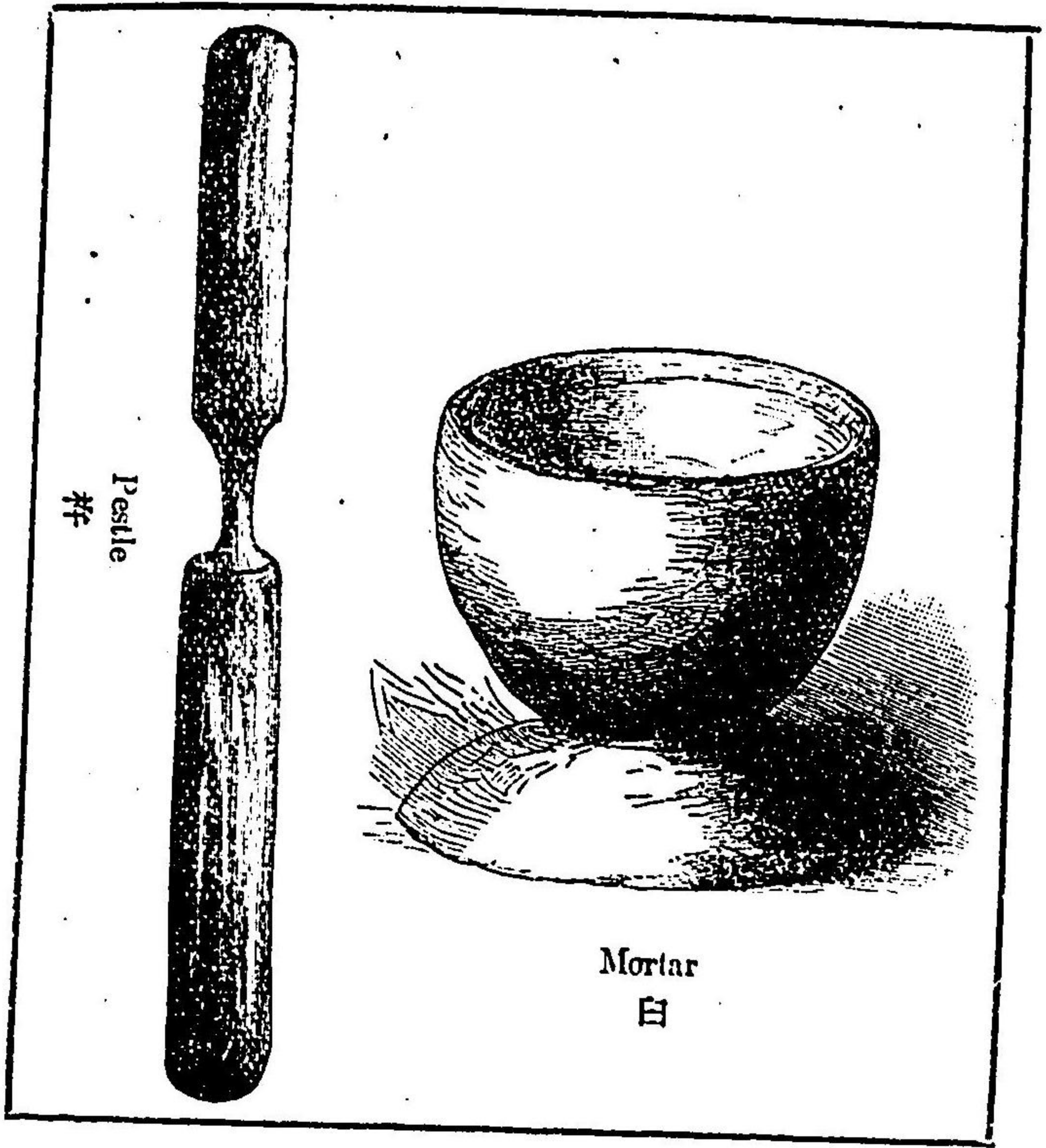
たるもるなく細工人の勝手に彫るなり其次に示せる圖は鬚揚箸にし
て勿論男子のみ用ゆ之を用ゆる事故二あり第一男子は神々様を祈り
御酒を供へるに此箸の頭を酒杯の中に入れ滴を散す爲めなり第二物
を飲む時上
口鬚の飲物
に入らざる
様に之を支
へ揚ぐるに
用ゆる爲め
對しても至極無禮の事と思ふに由る
酒宴葬禮新築祝の時アイヌは必らずキケウシユハシエイ kike-ush-lash
三と稱す鬚揚箸を用ゆ此名の意味は削り懸けのある箸と云ふ義なり



An ordinary moustache lifter
箸揚鬚の用式禮

あり何と
なれば口
鬚の飲物
に入るは
人に對し
ても神に

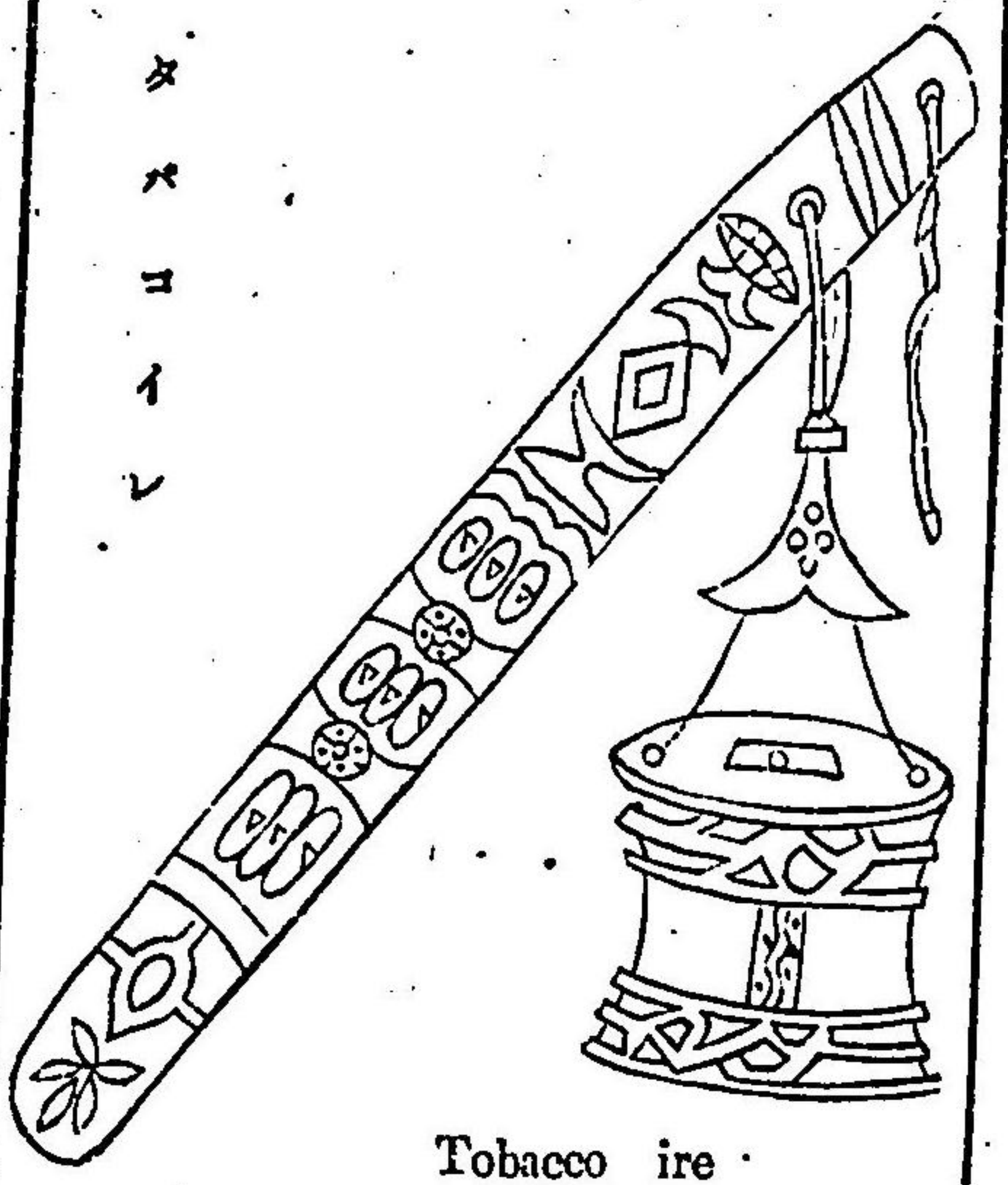
此箸は重も
に柳の木を
以て造るが
皆削り懸け
あるにあら
ず或は舟魚
熊の如き形
に模して削
られたるも
のもありア
イヌは此の
如きものを



貴重して
實とす白
は凡ての
家にある
一本の丸
木にて造
り之を以
て稻、粟
等を搗き
又粉にし
て餅菓子
を造れり

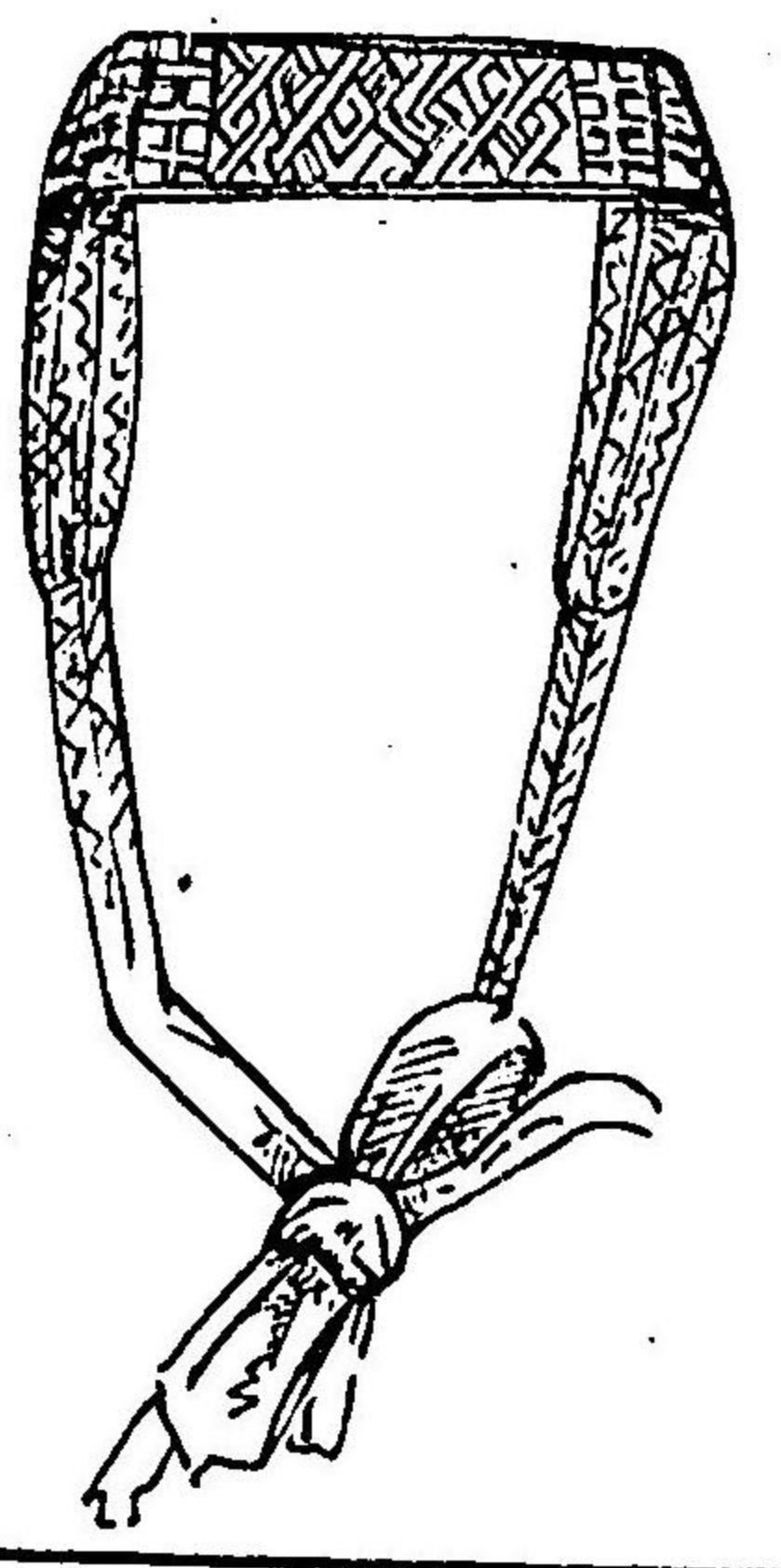
食物を造る用具の次は衣類を造る機の事を述べし機の製作は極單
純にて六に別たる此處に示す圖の第一はカマカップ Kanakap. と云ひ
經糸と緯糸とを別つに用ゆるものなり第二はヲサ O. と云ひ經糸を
別つに用ゆる第三はアファンカニット Ahunkanit と云ふ第四はハカヲニツ
ト Pekaonit. と云ひ第五はアツシユベラ Atush-bera, と云ひ第六は棒に
して織出しに用ゆるものとす
アイヌは蠟燭ランプを作ること知らざる故燭臺も亦なし蠟燭行燈
等の代に樺木の皮を剥ぎて他の木片に割り込みて之を點火す其光力
強からずして煤煙多し第五章に記せる如くアイヌは初め木の根を揉
み火を造りしなりしが漸く日本人と交通貿易するに至り火燧にて火
を造り其後附木を用ひ今は燐寸を用ゆるなり
アイヌが魚類木材又は他の荷物を負ふ時は之を腰に懸く腰に懸くる

にはタラ Tala. を稱するものを用ひタラの真中程の所を前額に懸け其
兩方の端を以て荷物を結付く然れども思の外重量は前額に感せずし



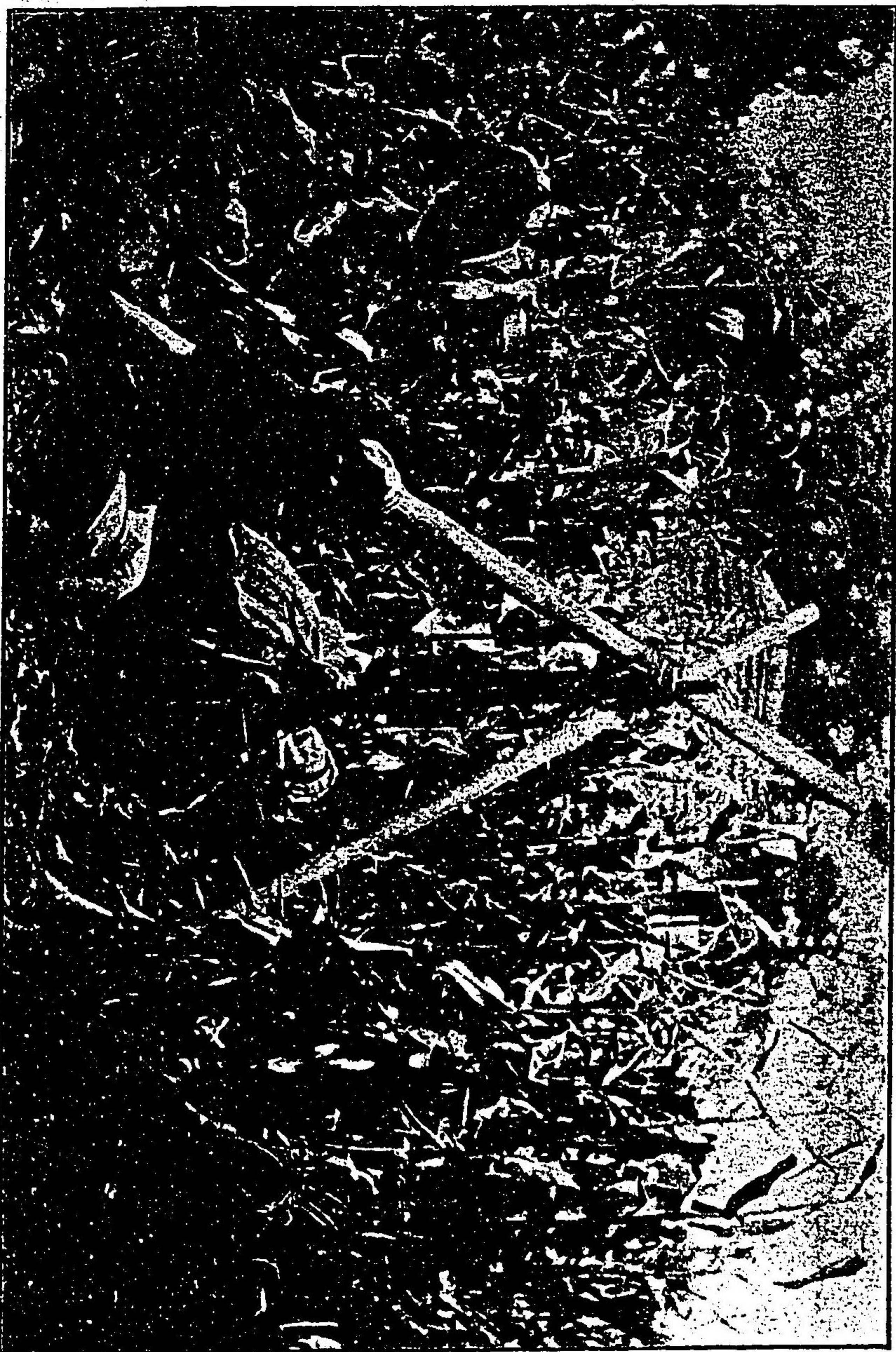
Tobacco ire

タ
マ
コ
イ
レ



タ
ラ
Tala

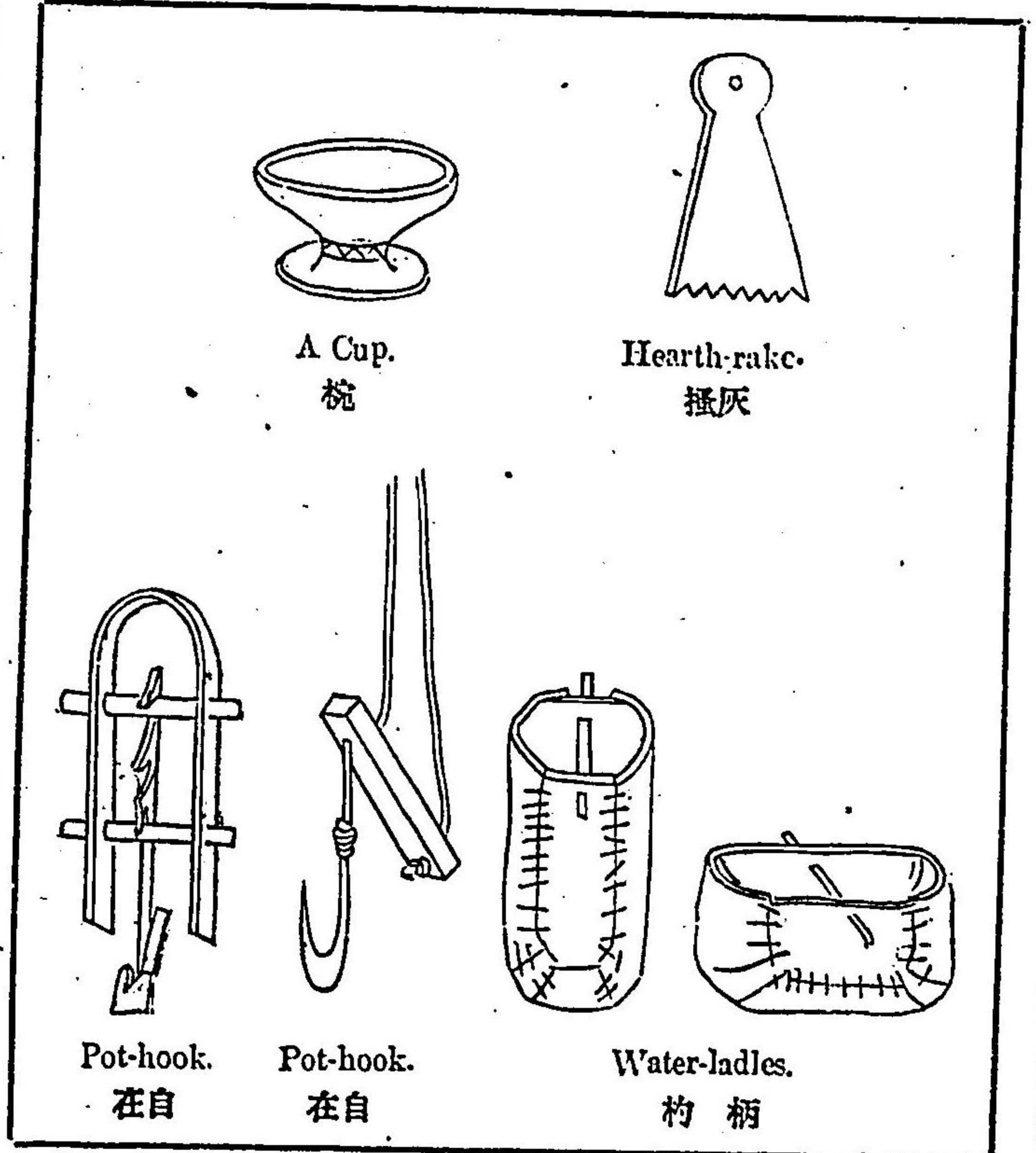
て却て腰に重みありと云ふ
煙草を喫ふは古代のアイヌの風俗にあらず又煙草は蝦夷地の天産に



CHILD IN A CRADLE.
雜 葉

おらざるを以て恐くは煙草を喫ふことは和人より學びしならんと思
 はるアイヌの用ゆる煙草は或は和製或は滿州製のものを見る煙草は
 男子の外老婦人も亦喫へとも若き婦女は決して喫はず此繪に示せる
 煙草入と煙管筒は胡桃の木にて造りたる甚だ古き品なりと見ゆ煙草
 入は鹿骨を象眼にし煙管筒も亦能く巧に彫刻して粧飾せられたり此
 の如き品を得ることは頗る六ヶ敷しと云ふ何となれば其持主死去す
 る時は皆之を毀損して屍と共に墓に葬るが故なり煙草入の端に挿し
 たる針金は煙管を掃除する爲に用ゆるなり
 凡て婦人は甚だ能く其子供を愛育す然れども誠に憐むべきことあり
 子供産れて凡る一月も経ば屋根より繩を吊り下げ籃に結びて鞆繩を
 作り子供を其籃に入れ置き外に出て行く此可愛らしき子供は母居ら
 ざる故大聲を上げて泣き叫べり然れども是は其子供を愛さざるが故

にあらす
 養育せん
 か爲めな
 り或人の
 云へるに
 子供は饒
 舌の大人
 の談話す
 ると同じ
 く其の聲
 を發する
 の外仕方



は此處に
 鞆の形
 と云ふ其
 にあらす
 なるもの
 めに不可
 子供が爲
 叫ぶは其
 にて泣き
 揺籃の中
 子供が此
 赤子が故

示す繪の如きものにて家根の梁より吊して爐火の近き所に至るまで
 下け其長は凡二尺六寸乃至三尺にして幅は凡二尺位なり
 婦人は實に能く子供を愛育すれども余輩の思ふには或婦人は其子供
 を無慘に扱ふと思はるることあり即子供の男女に拘はらず其股の肉厚
 き所を切りて後古木(榲桲)の皮の下に生ずる菌の如きものを取りて
 之を結付く著者熟々此習慣を考ふるに猶太及其他の國の人々か爲す
 割禮に擬ふものならんかとも思ひたれども決して然るにあらざるな
 り此股を切るは子供か其足を動かすも股擦を生せず又足を動かし其
 母親を煩ははさる爲にするとも云ふ其切傷に菌の如きものを結付
 くるは之を癒す爲めなりとす何故に是れか割禮の如きものにあらず
 と云ふに先づ女のみに限り祈禱を爲さず之を切り又之を切るに何の
 禮式もあらざればなり

第十八章 衣服

アツシ。針仕事男の上衣。脚絆。冠物。前垂。冬服。雪履。

アイヌの着る重なる衣服は長きものにしてアツシ Aitush. と稱す即
ヲヒヨウ糸の義なり其語の意味する如くアツシと稱する衣服はヲヒ
ヨウの木皮にて造りたるものにして乾燥する時は破損し易すと雖
濕潤せる間は甚だ強きものなり此皮は春四月か又は秋十月頃に採り
て家に持歸り凡十日間溜水に浸したる後日光に曝らし細く裂き紐又
は玉巻にす或時は之を縫糸にも造らる此皮を細く堅くする爲め齒に
て噛み或時は生皮を採りて噛むことあり此衣服の色は薄鼠にして肌
觸は堅きものなる故アイヌはアツシの代に柔かき日本の衣服を好む
は奇異なることにあらず

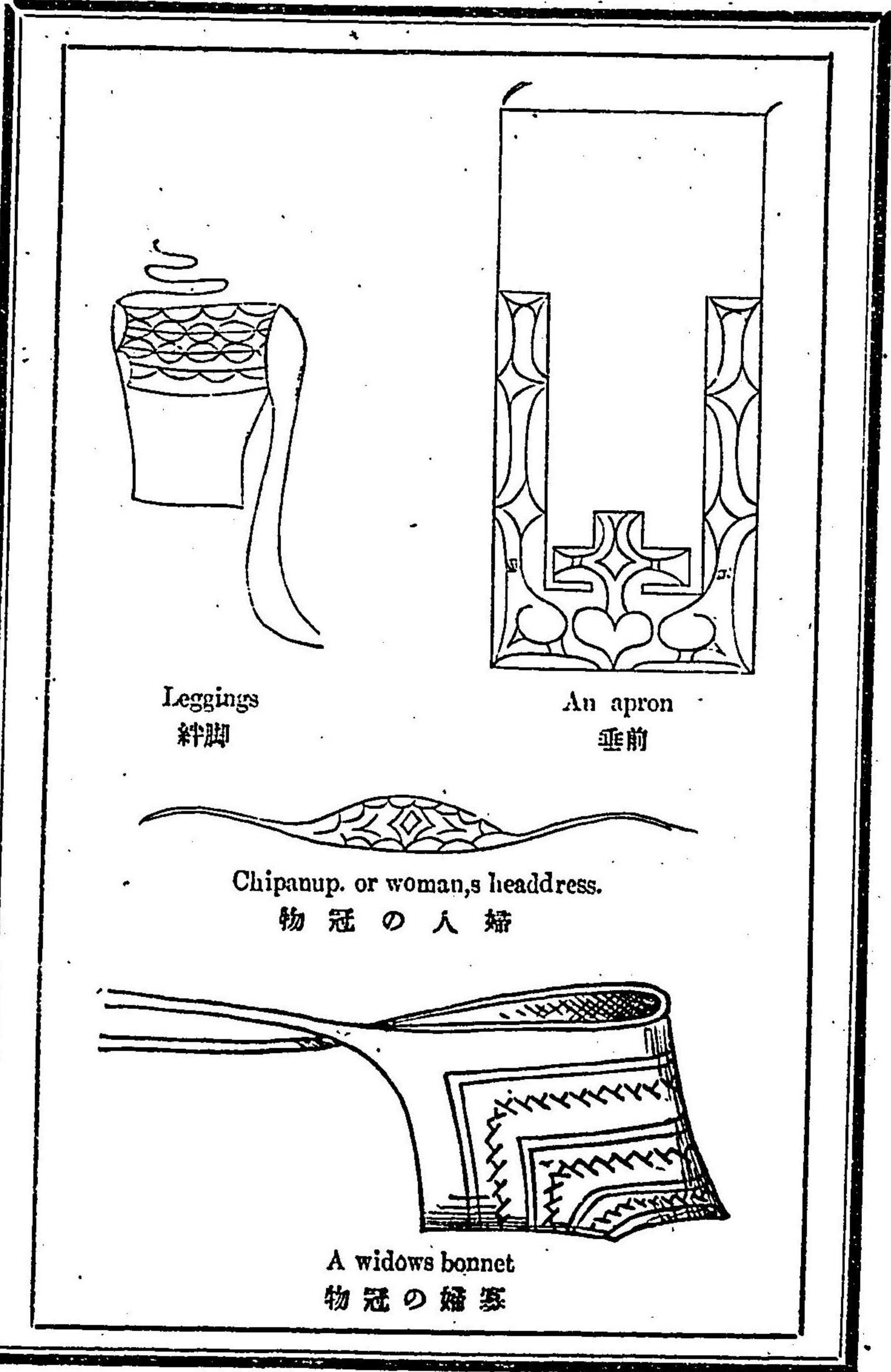


A WOMAN WEAVING CLOTH.

織機の女

然れどもヲヒヨウの木皮にて造りたる反物は望の如く充分に黒き色とならずんば之を望の如く黒くするには黒染を爲さざるべからず黒染は櫛又は赤揚の皮に熱湯を注ぎ暫らく浸したる後凡一週間鐵鏽の微温湯に浸す此の如くする時は反物は赤黒き色となる之を稱してクンネツプ Kunnepe. 即黒きものと云ふ

婦女は甚だ縫模様を爲すことを喜び好む之を爲すに或者は精巧のものあり其針仕事には屢々自分のアツシを原料として其上に日本の反物と色糸を加へ模様を縫取ることあり著者の持てるアツシは頗る美麗精巧なるが女の仕事の片手間に造りし故之を仕上るには凡そ一ヶ年間を費せしと云ふ各村落の縫模様は各異あるに依り其縫模様を見れば何れの村落にて造りたるかを見分けらる又男には男に適當と定められたる模様あり女にも亦女に適當と定められたる模様ありて男



Leggings
絆脚

An apron
垂前

Chipanup. or woman,s headdress.
物冠の人婦

A widows bonnet
物冠の婦寡

は必らず女に適當のものを着す又女は男に適當のものを着ざるなり
然れども驚く可き孔雀なる哉女よりも男の着物が飾ありて美麗なり
熊祭の如き祝ある
時は孔雀ある男は
其飾ある美麗の衣
服を着て傲り女は
格別美しく其口を
染め玉耳輪首輪指
輪等を着け夫に伴
はる余輩の見るに*
はして再更に造り換へしむるなり
大人は皆其頭の冷へざる爲め頭髮を櫛き上げて冠物を被る又其他此



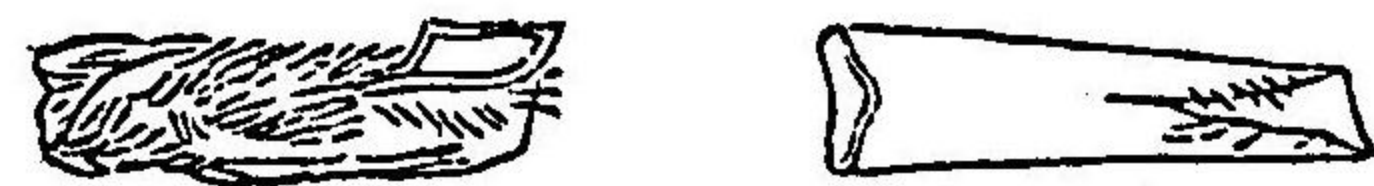
a coat
衣上るめ様模縫の子女

夫は其妻の造りたる縫模様を誇る然れども若し妻の造りたる縫模様の悪き時は甚た立腹し残らず之を解き縫

處に示せる繪の如し草又は菩提樹にて造りたる脚絆と前垂を用ゆ昔時妻其夫を喪ふ時は必らず其頭髪を剃る習慣あり其剃りたる頭髪の再び長くなる迄は成る可く家の内に居り長く伸ひたる時は再剃らざる可からざる



A fur coat
服冬のヌイア

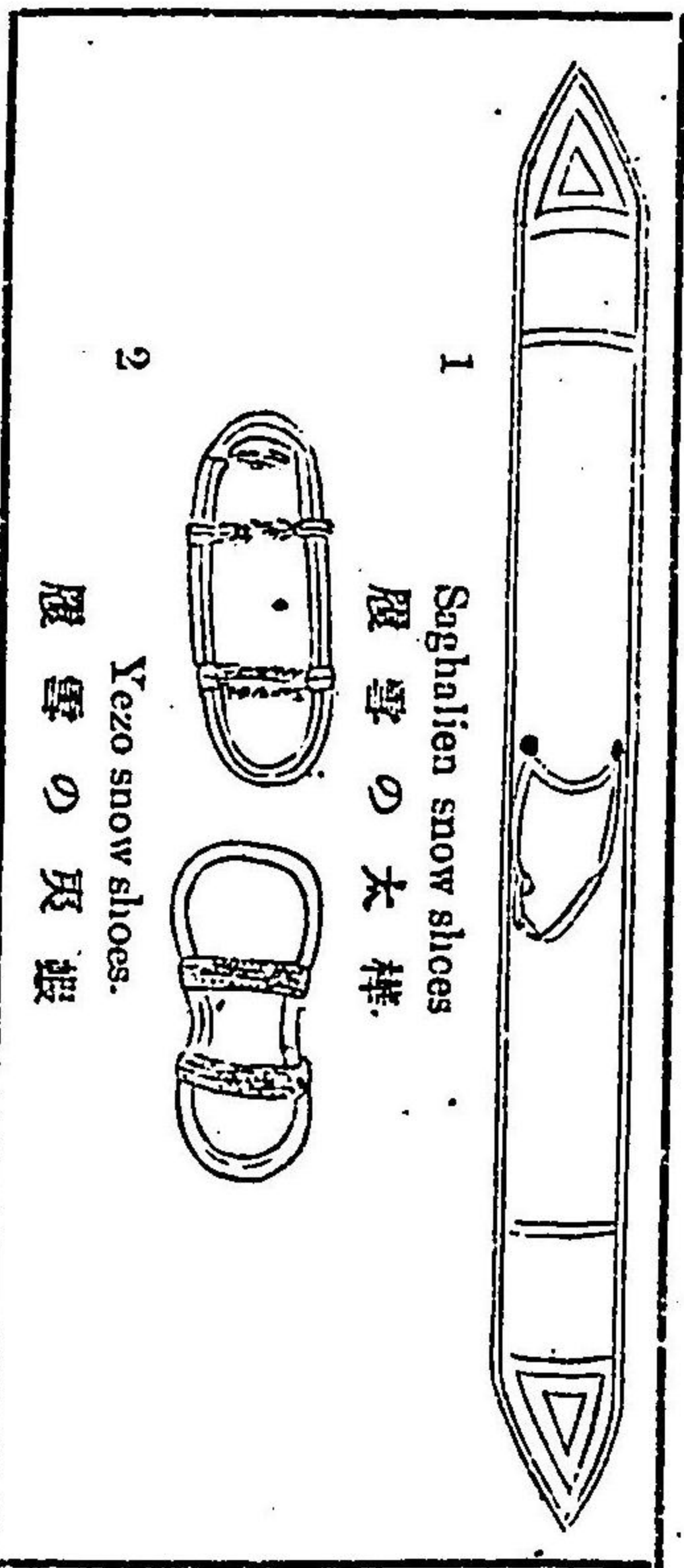


Skin boot for winter wear.
履皮

習慣あり是れ妻の心の深き悲哀を表はすなりアイヌが日本の剃刀を持たざる前は或は貝殻或は鋭き刃ある石を以て剃りたりと云ふ蓋し甚だ痛み苦しむたることならん而して妻は其頭髪を剃

りし後寡の頭巾を被る今は日本織物の切を以て造り頭巾の後には空氣抜の穴を作れり

冬は女着のアツシの裏に犬鹿狼又は熊の皮を着け手に手甲を着く昔は皮にて造りたる股引を用ひしか今は皮乏しぐなりし故股引を用ひ

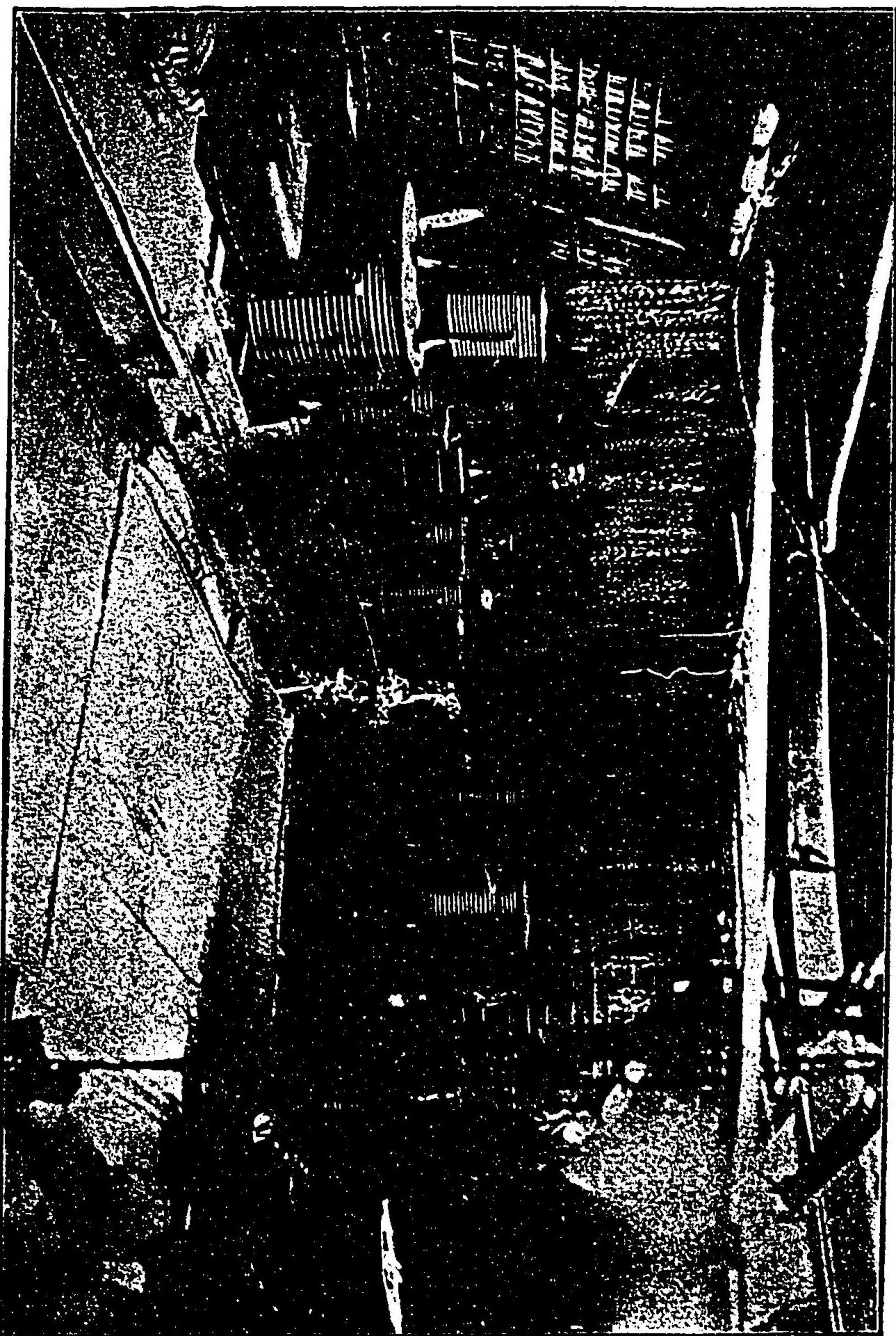


Saghalian snow shoes
履雪の大靴
Yezo snow shoes.
履雪の夷靴

ひ寝る時は布切にて頭を巻くなり雪堅き時は男はカンジキ雪履を穿く此處に示せる第一の繪は曾て函館博物館に陳列するものなるが樺太より來りしものありと云ふ其長

*す女は夏冬共に大概草或は蔑を以て造りたる脚絆を用

は五尺七寸幅は七寸半なり第二の繪は北海道アイヌのカンジキにして葡萄の木にて造らる是れは小にして餘り雪の深くして堅まらざる時は歩行し難しと云ふ



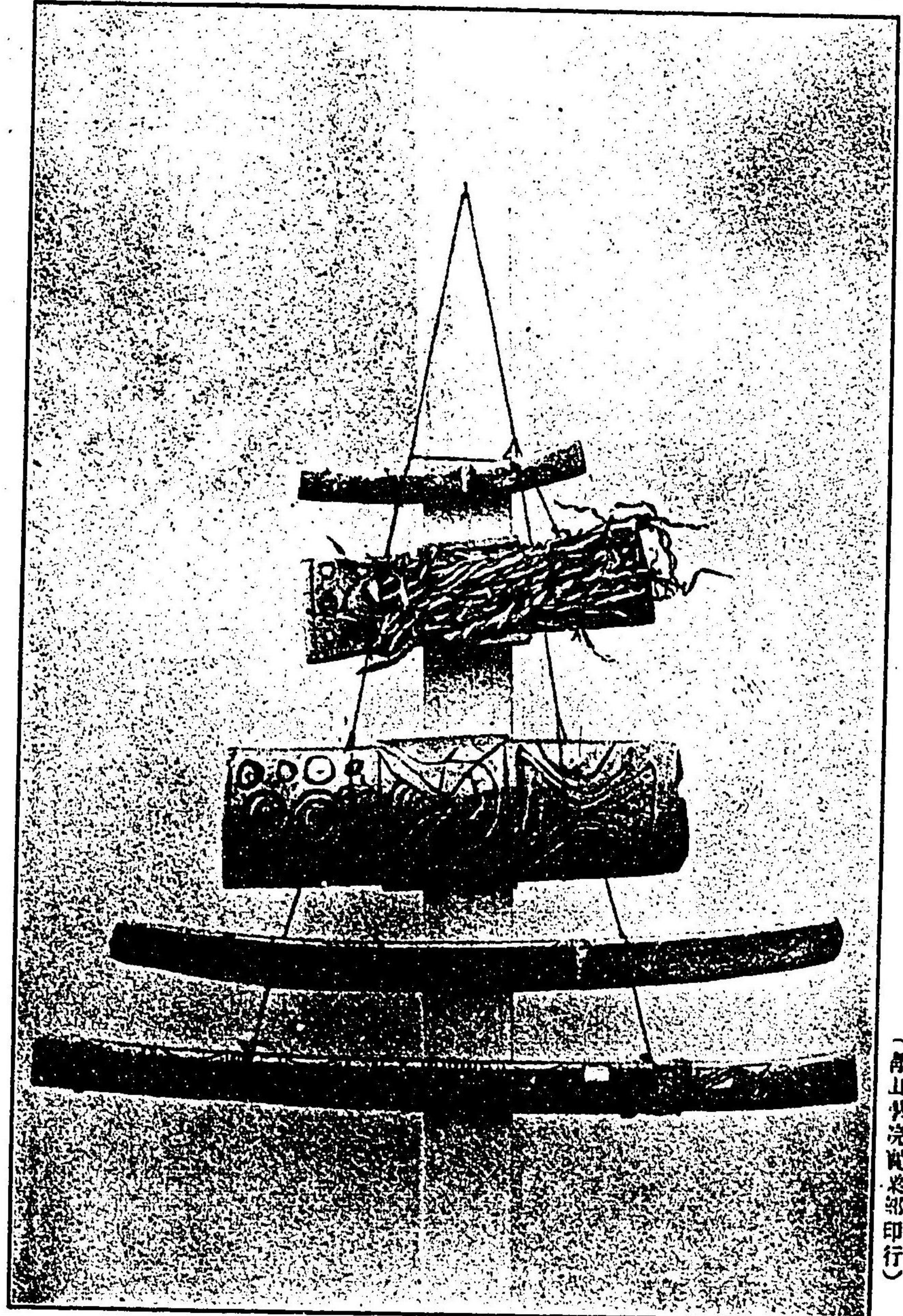
物寶のタカラ
AINU TREASURES.

第十九章 寶物及粧飾物

漆器刀劍イコロ。婦女飾物を好む。指環耳環耳環は植物崇拜の遺習。冠は植物崇拜の遺習。

アイヌの所藏する寶物及飾物は金銀眞鍮寶石の類にあらずして日本古代の漆器刀劍及鏝なり漆器をシントニ Shintoko. と稱す即奇麗なるものと云ふ義なり刀劍類はトンベ Tombe. 即光るもの又はイコロ Ikoro. 即寶物と云ふなり漆器は昔魚類獸類の皮の代に日本人より米及酒等と共にアイヌに與へられ或は又褒美として酋長に與へられたり故に殆んど此類の物は和製なり然れども其中には偶朝鮮の物も見ゆることあり刀劍の類は格別に世襲物とすれども和製なり然れども現今は大概刀身なきもの多し此刀劍類は細長き箱に入れ住家の梁の上に置

かる而して之を他人に見せることを嫌へり又弓矢鎗又は煙草入を賣
 物とする人もあり又イコロと稱するものゝ内に木を以て造られたる
 古代の刀劍矢筒又は懷劍の如き形のものあり其繪は以下に示すが如
 し是は甚だ寶として熊を屠る時に必らず其頭を飾る是れ熊の靈も此
 ものゝ靈と共に天國に送られ熊を喜ばすと思ふが故なり
 婦女は子供らしく口邊を玩弄の如く粧飾するを好む故昔狡猾なる和
 人の小賣商人は之に乗して暴利を得る者ありし假令ば札幌にて凡代
 價十五錢程の白銅にて作られし耳環を買入れ之を銀なりと稱し二三
 圓に賣付ることもあり又札幌にて三十錢程の價の耳環を或時平取に
 於て四五圓に賣付るを余輩見しことあり而して此等の品を買ふに婦
 女の持金にて足らざる時は小賣商人は彼此苦情を云ひし後漸く迷惑
 らしき顔を爲し代金の代に鹿又は熊の皮を受取ることあり此の如く



(青山共済賣部印行)

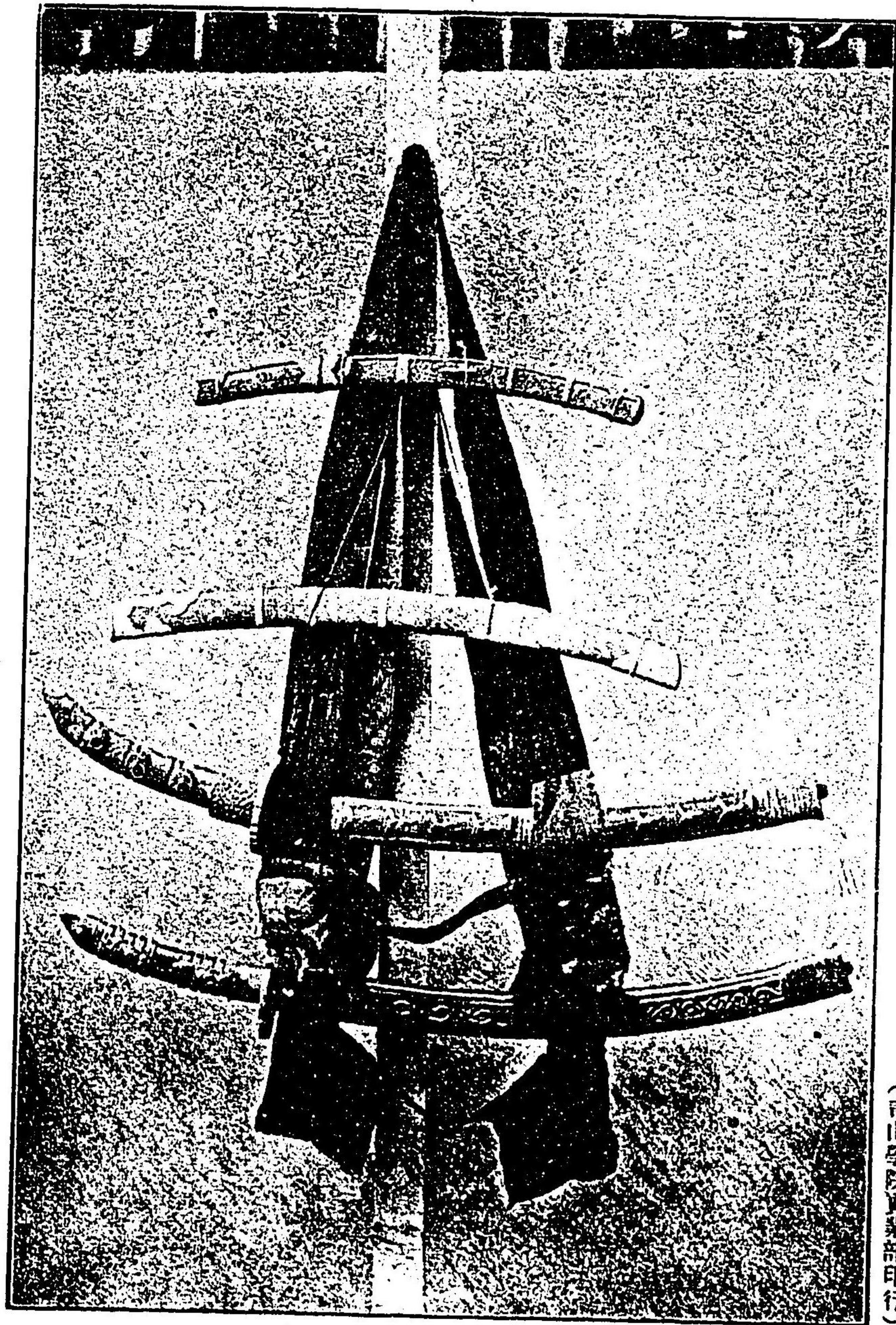
IKORO.
ロコイ

にして二三個の耳環の代に狐の皮又は鹿の皮二三枚を取り微笑しつゝ
 歸るを余輩見たることあり嗚呼是れ子孫長久商賣繁昌なる哉
 婦女は耳環の外に又甚だ硝子玉を好み其或ものは和製にして或も
 のは支那製の品を見ることがあり然れどもアイヌの信ずるには是は古
 代のロシカイ Poshikai. 即露西亞人滿州人より得たるものと思へり此
 の如き品は札幌にて一個五六錢にて買はるれどもアイヌの遙かに遠
 き田舎にては一圓或は一圓五十錢に賣らるることありしなり
 又其外指環を好み或者は眞鍮にて造られし品を金と稱し白銅にて
 造られし品を銀と稱して賣付け小賣商人の暴利を得ることあり女子
 供の用ゆる首環は各細工人を頼みて造る是は皮又は日本の布切を以
 て臺とし融したる鉛を花又は葉の如き摸型に入れて飾物を造るあり
 樺太の婦人は眞鍮と滿州の貨幣を以て飾りたる帶を用ゆるなり是は

札幌の博物館にも陳列せらるゝに依り見ることを得べし衣服を結ぶに屢々美麗なる具を用ゆ又刀の鏝を火に焼き赤銅の如く爲し得れば婦人等甚だ之を喜び樂めり

男女共に耳環を用ゆ男は金屬の環を用ひざれば赤き布切を用ゆ今茲に耳環の事を述ぶるに當り著者數年以前の出來事の記憶に存せるを思出し以て下に之を記すべし

(或夜著者は或アイヌの小屋の内に衆多の人々に説教して曰く人間は何れの國の人にも何れの人種と雖其言語容貌文明等の如何に拘はらず神の前に於ては兄弟なりと云ひしが之を聽聞せし者甚だ喜び其説教を聽し後著者に向つて曰く我等の如くに汝の耳には未だ穴を穿け居らざる故今我等汝の兩耳に穴を穿くべし左すれば誠に汝は我等の兄弟となるなり)と其説教に就き深く聽衆を感動せしめられたれども余



(青山學院實業部印行)

OLD SWORDS.

劍古

輩は己の耳に穴を穿け赤き布切を入れざるが爲め其最初の感動は殆んど失ひたり
 老人の話に依ればアイヌの祖先等がコクワ Kokwa (Achidea.) 又は葡萄蔓を以て耳環を造りたりと余輩の思ふに是れ蓋し古昔の植物崇拜に關するものなりと思ふ之に就き古代の口傳は下の如しコクワと葡萄蔓は元來極樂に在りしものなり扱極樂に在る總ての樹木は金銀赤銅の木なり神は此世界を造り給ひし彼之を調べさせる爲めアイヌを天より降し見せられしにコクワと葡萄蔓は此世界に在らざりしことを見し故彼は再び天に上り金銀のコクワ各一本と又赤銅の葡萄蔓一本を持ち來りて之を地に植へたり葡萄蔓は赤銅の木に巻き付きコクワは金銀の木に巻き付きたり此の如く極樂に在りしコクワ葡萄蔓の此世界に來りし原因は上に記す如くなり

此等の蔓最初極樂に在りしが故にアイヌ曰く人々病氣の時此蔓を探りて之をイナヲにして拜み且祈るべし其祈は此の如くすべし嗚呼神的蔓よ我祈りて汝を呼ぶ此人は病氣にして甚だ危篤なり願くは早く彼を助け癒し給はんことを嗚呼神的蔓よ汝は最初極樂に在りしが此世界に降り給ひしなり此故に汝は此人を助く可きものなり極樂の土は金あるが故其土より生長するものは総て甚だ強く活潑なる生命を有つ此外又汝は藥に造られ人に飲ませば其飲みたる人を癒すべし是れ汝の務なればなり此故に神よ早く此人を癒し給へと此祈を爲したる後拜する者はイナヲに向つて拜したる後其木を細かに切り熱き湯に浸し病人に飲すへしと此戒を見れば必らずコクワと葡萄蔓は神なりとアイヌ信するは明にして此蔓を以て耳環を造ることと共に併せて推究すれば植物崇拜を包含すること明あらん

抑アイヌ粧飾の爲め用ゆる耳環に植物崇拜の趣意を包含するとせば況んや冠物を冠るに植物崇拜を明かに見ることを得さらんやアイヌ神を祭り祝賀ある時は冠物を用ゆるは既に本書にも之を記せしかアイヌの事に就き著述するは必らずしも王に限りたるか如く多くの人々の考ふるか如く讀

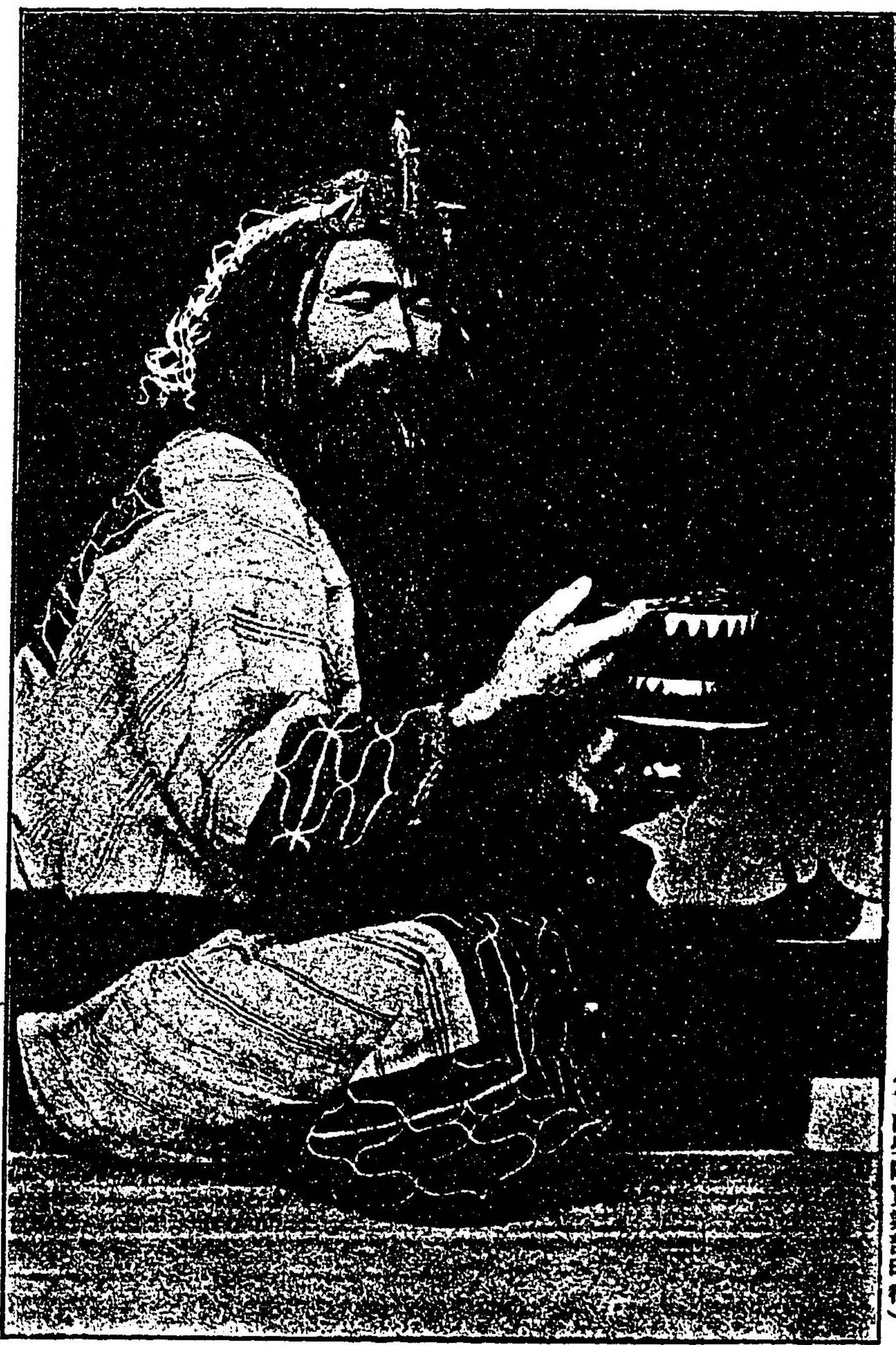


Crown with fox totem.
冠の拜崇狐

る者は皆此事を記す大概著者の思ふに平取の酋長なるペンリの冠を見たり或は之を寫真に取らずんば著述すること能はざるもの如く思へり然れども冠を著

者の考ふることゝわらは甚た量見違ひにして親父に草鞋の相違の如し
 冠物は幼き子供等も亦屢之を冠ればなりアイヌの話に依れば其冠物
 を用ゆる所以は唯頭の毛髪か眼を蔽ひ又は飲食の器具に落入らざる
 爲めに用ゆるなりと云ふ冠物に三の名あり其一はサバウンベ *Saba-*
unbe と稱す即頭に着けるものと云ふ義なり其二はイナラル *Inaru* と
 稱す即崇拜物の屑と云ふ義なり其三はエカシバウンベ *Ekasipambe* と
 稱す即老人の頭に著けるものと云ふ義なり女の頭に用ゆるものはチ
 パヌツプ *Chippand* と稱す即頭を結ふものと云ふ義なり是は衣服の事
 を記す章に於て尙記すべし

冠物に關するアイヌの説話は下の如し(大古人々祭を爲せし時は男女
 共に髪を結ばさりしが故毛髪屢目の上に垂れ又は飲食の器具に入り
 困りたる故に祖先等曰く(是は宜からず飲食器に毛髪の入るは失禮な



(香山學院實業部印行)

CROWN WITH KITE TOTEM.

冠の拜崇鷹

り故に頭の上に冠即イナヲルを以て頭を巻くべし此くすれば毛髪
 の落散を止むへしと故にアイヌは大なる集會を催し決議して男は冠
 物を頭に着け女は切布を以て頭を結ふべしと定めたり
 今述べたる説話は勿論今日のアイヌを満足させるには充分なりと雖
 余輩は未だ之にて満足すること能はず余輩の考ふる所は下の如し男
 の冠物は王に擬するにあらず唯髪の垂れざる爲めに用ゆるのみに
 あらず併し必らず崇拜物の遺旨なりと思ふ若し否らすば我讀者に問
 はん何故に其冠物に獸又は鳥の形に擬し或は眞の鳥の頭を付けるか
 とアイヌ曰く熊の頭を以て飾りたる冠物を冠る男等は極傲慢なり鳥
 の頭を以て飾りたるは温厚にして心良き者なりと云ふ然るに此事に就
 き或者は必らず熊より生れ出て或者は必らず鳥より生れ出て、獸類
 鳥類を拜むことを附加ふるは誠に冠物は動植物崇拜の遺風なりと定

ひるの外なかるべし而して讀者よ余輩は乞ふ動植物崇拜鳥類崇拜の
章を未だ讀まれざる前に意見を決せられざることを何となれば余輩
の見し所の冠物の飾には熊狼狐鳥鷲等あり又髮揚箸には魚舟熊狼等
ありたればなり



(青山學院實業部印行)

TATTOED MOUTH AND ARM OF WOMAN.
 人婦るあ身文に腕指手口

第二十章 文身の事

文身の習慣廢め難し。文身の仕方。文身に就ての口傳。穴居人文身を爲さぐる事。文身せざるを戒む事。文身の由來。蛙に文身ある事。蛙の名の源。雀の文身。せられし事。雀の饗應。鳥の死する事。

凡てアイヌ婦人等は唇手腕に文身し又或部落に於ては額に文身するは遍く人々の知る所にして男の文身せざることも亦知らるなり此習慣は甚だ解し難くして余輩は今まで如何程アイヌに質問するも文身の由來に就ては能く論理に適ひたる理由を未だ會て聞かず又此習慣は廢め難しと云ふ事を示すに下に記す出來事を以てすべし或時著者

家婢の爲め極年若きアイヌの娘を雇ひ置しが其娘十二歳迄は唇に文身少しもなきが其後も必らず文身せざる様に我妻及余は厳しく命じ置たり其後余は我妻を伴ひ他行し二月経し後我等歸り來り見れば豈に圖らんや其娘の唇に幾分かの文身あるを見たり故に余輩は何故に汝は文身せしかと尋しに彼は且て他の女の子に文身あるに我のみに無ければ甚だ心寂しき故文身せりと答へり然れども余輩の思ふに是は眞の事故にあらす親達の命令に依りて文身せしものなればなり文身の事由を老人に聞しに答へて曰く我等の祖先か此の如くに飾りし故我等も亦其の如くするなりと云へり

文身は青黒き色にして之を入れるは甚だ單純の仕方なりと雖痛み苦しき故少許つゝ入れ全く仕上るには數年間を費す文身の仕方は先ツアヲダモの木皮を採り鍋の中に浸して火を焚き煮るなり其後シラカ

ンバの皮を採り鍋の下に焚いて黒くす其鍋の下の充分に黒くなりたる後婦人小刀を取り文身せんと欲する所を少しつゝ傷けて自身の指環を鍋墨に付け傷けたる所に入れ鍋の中に在る木の皮の汁に布片を浸し之を傷けし所に當てゝ濡すなり子供等の文身する時極最初は鼻の下の真中を始めに次に下唇の真中を少し爲し漸次に上下に施し左の耳より右の耳に至る迄入るものとす其手腕額は結婚せし後に入るゝなり

此習慣の本源に關する口傳あり下の如し(神)的アイヲイナと其妹天より此世界に降りし時妹の方文身せられたり而して二たび天に上りし前アイヌの婦人に其習慣を傳へたりと此口傳は誠に短き口傳にして其文身の源因も亦甚だ單簡なり即下に記すが如し女の中に悪しき血多くあり其血を取らざるべからず故に其悪しき血を流す爲め文身を

爲し以て女の身体を強壯にするなり何故に文身は口と手にするやと
余輩問ひたるにアイヌ答へて曰く口と手に文身する所以は口と手は
能く人に見られ易き所なるか故なり其能く見られ易き所に文身すれ
ば病を起す悪魔を驚かし逃去らしむるなり扱天の神達の妻神等は皆
此の如く文身せられたる故悪魔來りてアイヌの婦女の文身せられた
るを見て彼は神達の妻神と思ひ誤りて忽ち逃去ると云ふ
文身は病を去らしむる方法なりと老婦人深く信じ居れり而して又必
らず身体の惡しき血を流し強壯にするなりと信じ疑はず遂に習慣を
爲したるなり其習慣は下に記すが如し曰く老母の眼朦朧として見へ
難からんとするに至れば尙能く見へしめんか爲め必らず口と手に新
らしく文身す此習慣はバシカラインガラ Pashikaingara と稱す即文身
の上を通して見る義なりと余輩の知れる一人の老母ありしが彼は屢



(青山學院實業部印行)

AINU WOMAN WEAVING HER ORNAMENTS.

人婦るせ飾粧

眼を壯くせん爲に此習慣に従へり
 又傳染病或部落に流行すれば總ての女は皆病の惡魔を追拂はん爲に相
 互に文身す此習慣を稱してウバシユフララクカレ Upsi hura-rakare と
 云ふ即文身の句を相互にさせること云ふ義なりと
 或人の話に昔のアイヌの女等は蝦夷地に住ひしコロポックルの婦女
 に文身ありしを見て甚だ立派ありと思ひし故自分も亦真似を爲して
 文身せしかりと云ふ然れども是は一般の説にわらず却て其説の虛妄
 なるを證する他の口傳あり曰く穴居人は甚だ矮小の人類なり而して
 其文身することは知らざりしものなりアイヌが屢穴居人と戰ふて其
 婦女を囚にし再逃去らざる様にアイヌの婦女の如く文身せり總て身
 長の短矮きアイヌは皆穴居人の婦人より生れしものありと云ふ
 女の子供等が文身せざるを憂へ年老ひたる婦女等は甚だ注意して文

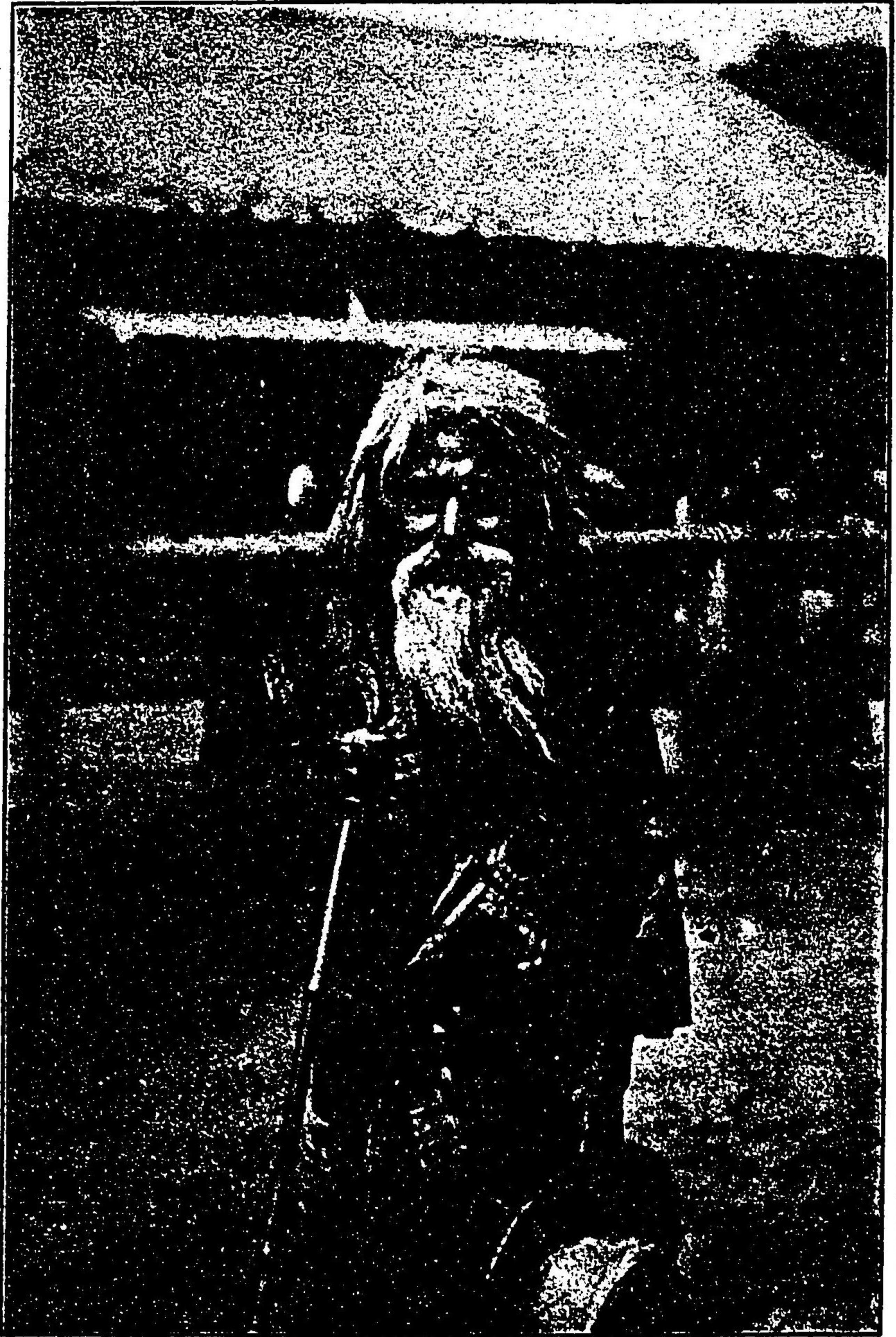
身すべきことを教ゆるに下に記すが如き事を以てすアイヲイナの神
 的妹は我等を教へて曰く婦人は誰にても文身なしに結婚すれば大なる
 罪を犯すなり而して若し其儘死なば極深き地獄に陥り鬼等大なる
 庖刀を以て一時に残らず文身を爲すと女の子供等之を聞きて甚だ恐
 怖せり何となれば一時に残らず文身すれば苦痛に堪へざればなり
 男も亦同じく文身せざるを恐れしむる爲下の如く云へり文身なき女
 と結婚したる者は必らず饗筵の席に出つべからず文身なくして出る
 は神に對しても人に對しても誠に失禮の事なれば自分の身の上にも
 他の客人の身の上にも神の怒を招くなり云ふ
 讀者よ前に記せし習慣の理由は如何なるものかアイヌは其理由を知
 らざれども余輩の思ふに蓋しタブー Taboo 即禁制又は採擇の意味あ
 るものならん余輩は屢若き男女を夫婦にする仲媒を頼まれたりしが

既に夫婦になることを約束すれば縁女の唇に文身を全ふす縁談の調
 はざる前には身文出来上らず文身出来上れば誰にても其女の人の妻
 或は縁女たることを知る彼女は最早或る格別の人の爲に撰ひ定めら
 れたり最早縁女たり最早結婚せられたるものなりとす彼女の文身せ
 られたる唇は其夫の爲にのみ動き又其文身せられたる腕は其夫の爲
 にのみ動くべきものなり
 文身の事に關し一の奇妙なる想起れり即ち蛙足に女の文身の如きも
 のありとアイヌは思へり故に左の如き奇妙なる口傳あり蛙の元祖は
 惡の爲に神に呪はれたる女なりと云ふ而して其刑罰に依り身体變化
 されて魂は惡魔となりたりと云ふ
 (昔婦夫の男女ありしが數月間は相互に睦しく交り暮らせしが其後此
 女は性質惡き者にして夫の命を守らず兩親にも不孝にして彼等を呪

ひし故兩親皆死たり又同じ仕方にて夫をも殺したり其後六人の夫を
 持ちしが同じく呪ふて皆残らず殺したり神は総て此等の惡事を見給
 ひ怒り給ひし故其女の身体を變化させて蛙にし又後に遙か谷地に投
 棄らるゝ時神彼を呪ひ云ひ給ひけるは嗚呼惡しき女よ我は始め汝を
 造りたりしが汝は甚だ兇惡にして汝の兩親を殺すのみならず汝の夫
 も他人をも殺したり今より汝は蛙となりて谷地沼池等に住ひて惡魔
 となるべし汝の子供は於玉拘子となり極汚き所に居るべし汝若し人
 間の住む所に出れば人々は見當次第汝の頭を撃ち汝の屍を投棄つべ
 し是即蛙の起源たり故に誰にても蛙を能く吟味すれば其足は少し
 く女の手の如く文身せられたるを見る蛙の元祖は女なりし故今にて
 も少しく文身を見ることを得るなり扱人間の中の或者が蛙を憐み神
 なりと云ふと雖其實は否らず蛙は惡魔にして幽靈の親類なれども彼

等は昔人間にて人間の習慣を守りし者なるが故今も尙冬に至る毎に
 蝦夷地を去りて内地に行き品物を買入れ春に至れば蝦夷地に歸り來
 り飲食して甚だ喜樂めり春の中に蛙が聲を上げてフワツフワツ Owa
 Owa と鳴くは即内地より持來りし物を飲食し喜ふ饗筵の聲なりと云
 ふ
 蛙に關し今一つ面白き話あり即其名の由來に關することなり下に記
 すが如し蛙に三の名あり一はトラルンベ Toorunbe 一はヲキヲルンベ
 Oki orunbe 又今一はウエマンヤブテウタラ nemanypa utara と稱す其本
 名はテレケイへ Teraka-ibe と稱すれども或人はヲーテレケイへ Oteie
 ke-ibe と稱す然るに蛙を稱してフワツフワツト云ふは其聲を聞
 けばフワツトフワツトと聞ゆるか故なりトラルンベ Toorunbe と稱す
 る名は沼に住ひしものと云ふ意味にて蛙は此の如き場所に住へるも

のなるが故なり又彼は谷地の笹の中に住ふか故ヲキヲルンヘ Okium
 三三と稱す即笹の中に存在するものと云ふ意味なり又蛙は冬は寒き
 間は皆日本に移住し春に至り雪の融ける迄は蝦夷地に歸り來らざる
 故ウエマンヤブテウタラ nenan yajutaru と稱す即 商より歸り來り
 しものと云ふ意味なり彼等日本より歸り來る時必らず酒や米を買入
 れ來り之を飲食して樂むときに喜はしき鳴聲を上けるなり蛙は飛ん
 で物を食する故テレケイヘ Terakeibe 又はヲレケイヘ Oterakeibe と稱
 す即飛んで食ふと云ふ意味なり
 以上述ふる所は勿論可笑しき話なりと雖蝦夷地の如き嚴寒の地に冬
 期間蛙の鳴聲を聞かず故に冬居らざるは必らず日本へ移住せしなり
 と思ふは鳴聲を聞かざるに由る又蛙は乾きたる陸地にも又濕ひたる
 谷地にも住ふものあれば海は移住の邪魔とならざるなり飛んで食ふ



AINU MAN'S COAT.

衣上るあ様模縫の子男

(青山學院實業部印行)

者と稱するは誠に適當なり飛んで蠅又は他の虫類を呑むが故なり然れども日本に行き買物をするに云ふは全く想像より出でたるなり文身の事を話すに雀も亦少しく關係あるが故に今此處に其事を記載すべし雀をアマムエチカツプ Amum e chikap と稱す即粟稗を食ふ鳥と云ふ意味なり上嘴の上に少しく黒き斑あり是即文身あり何故に此の如き斑あるかは下の昔話に示すが如し或アイヌは雀を殺せば必らず其頭と毛を拜み又イナヲを捧ると雖之を守として用ゆるにあらず其昔話は左の如し

(神天地を創造し給ひし後雀を造り給ふて陸上に置き給ひしが女等曰を搗く時白の中より粟稗飛散りて落しかば雀來りて之を食へり故に雀を稱してアマムエチカツプ Amum e chikap と云ふ即粟の類を食ふ鳥と云ふ意味なり扱神世界を創造し給ひし後最高き天國へ歸り給はんと

思ひ給ひし時總ての鳥類獸類奉送會を催さんと決したり然るに雀は此奉送會の催を聞かず文身を爲し居りしが其定め時刻になりし故鳥類獸類は皆朝早く暇を告んとて奉送會に行きたり雀は他の者の會を爲すを聞き何故かと其所以を聞きしが最早時間なきが故文身出來上らずと雖中途にて止め他の者と共に行けり此故に雀の嘴を吟味すれば上嘴に文身の少なき斑見ゆるなり祖先等の云へるに雀を殺し其肉を食ふことを得れども其靈を送るには必らずイナヲを捧ぐべしと云へり

今雀の事を記載せしが尙此鳥に就て昔話あり此處に記載すへし昔少なき雀あり粟を臼にて搗き六個の桶に容れ之を醸して酒とする爲め東窓に置きたり數日の後に至り酒の香家の内に満しが故諸神皆類に之を飲み味はんと爲し給ひたり漸くにして酒の醸せたる後酒宴を設

け多くの神々を招き饗應を爲したり其饗應に來りし者の中には鶯鷓
鶯鷓及他の鳥類數多あり皆其甘美なる酒を喜ひ味はへり彼等の宴
酣なる時鶯鷓立ちて衆客の前に跳り外へ出て榭實一個拾ひ嘴に乗せ
て靜かに酒桶の中に置きたり是は誠に酒味を良好にするか故皆喜び
たり此後鶯鷓も亦衆客の前に跳り彼も亦同じく外へ出て汚き土塊を拾
ふて内に入れ無禮にも之を酒桶に入れたり是は誠に酒味を悪しくす
る故神々の間に大なる騒起りたり其無禮を怒り鶯鷓を擊殺さんとせし
が衆客は之を仲濟せん爲啄木鳥を呼び入れたり然るに啄木鳥曰く雀
よ汝は酒の造られたる時我を招き飲ましめざりし故如何程此騒が大
きくなるとも我は仲濟せざるなりとて少しも顧みざりし故彼等は嗚
を呼びたりしか彼も亦同じく顧みざりし故誰も仲濟する者なく鶯鷓は
終に殺されたりと云ふ

アイヌ人及其說話 上編終

明治三十三年十月
明治三十三年十月
十月十日印刷
發行

著作
權有

著作

シエー、バケエラ

發行者

堀田 達治

東京市京橋區銀座四丁目二番地

印刷者

山崎 久吉

東京府豊多摩郡澁谷村
字澁谷一番地

發行所

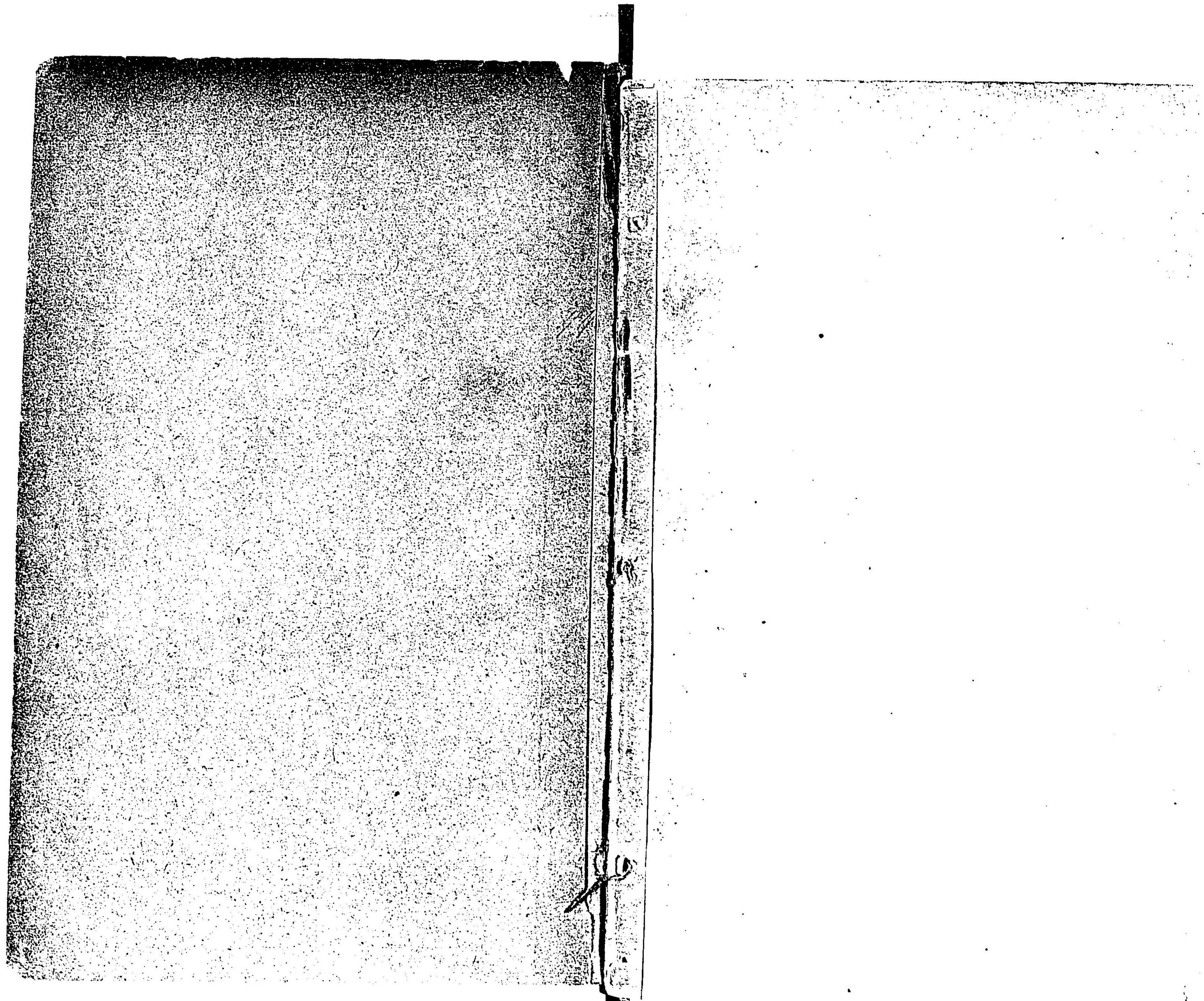
致文館

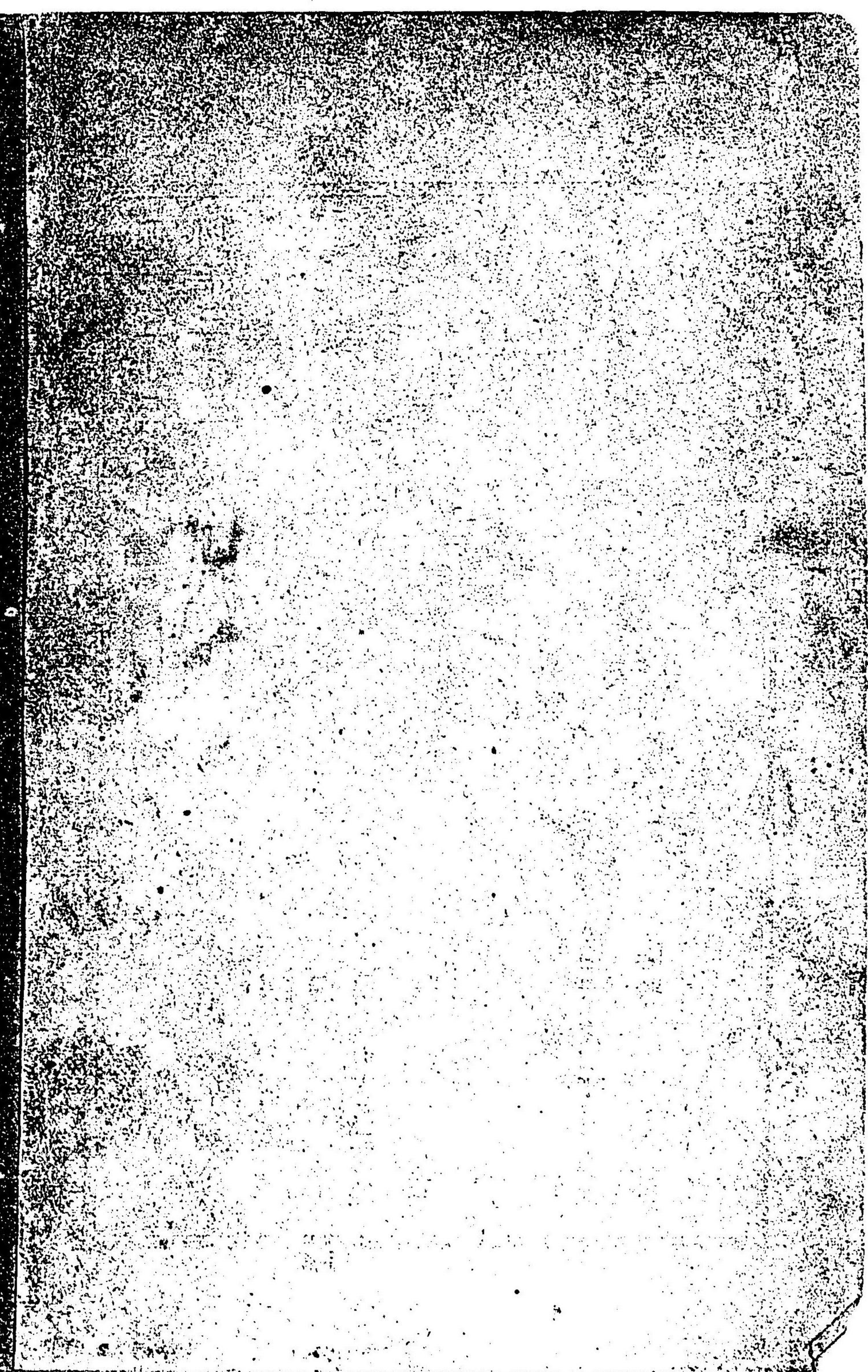
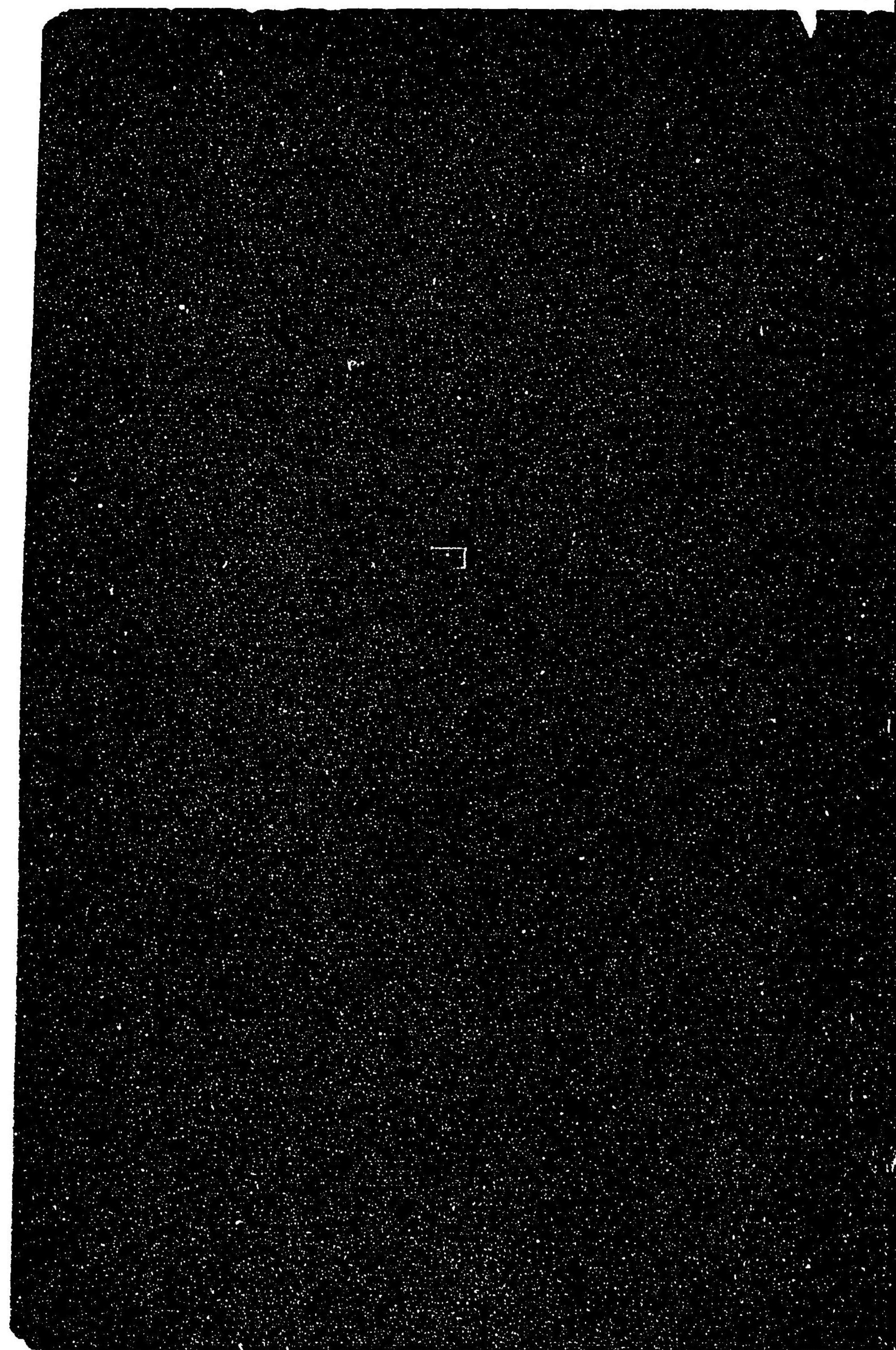
東京市京橋區銀座四丁目二番地

印刷所

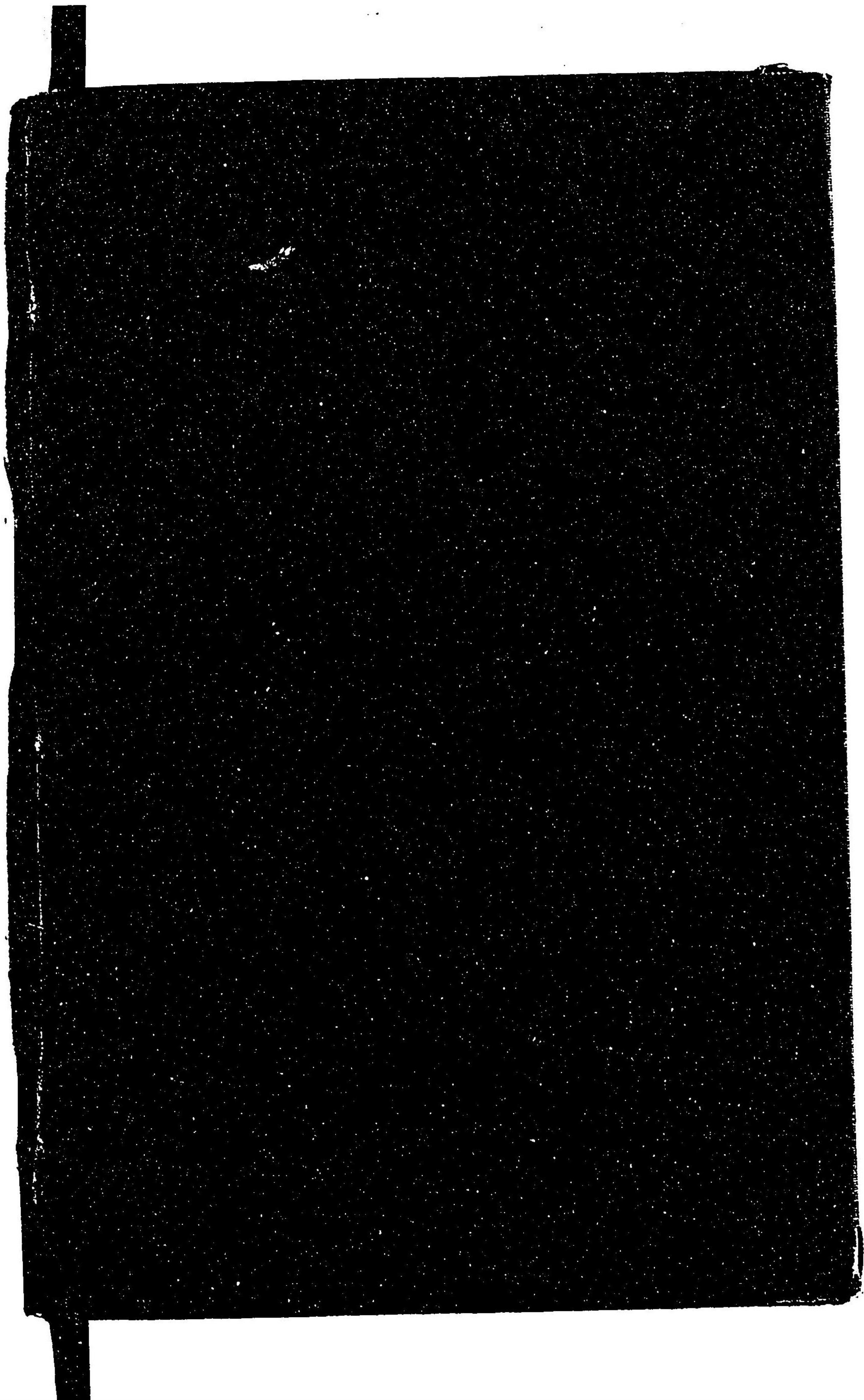
青山學院實業部

東京府豊多摩郡澁谷村大字
青山南町七丁目一番地





88
170



88
70

M

027274-001-0

88-70

アイヌ人及其説話 上・中編

ジェー・バチエラ/著

M33, 34

ADJ-0001

